

熊本県文化財調査報告第201集

坂口遺跡

－主要地方道熊本菊鹿線単県道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査－

石清水遺跡

－下林柳瀬線街路改良事業に伴う埋蔵文化財調査－

2001.3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、主要地方道熊本菊鹿線単県道路改良工事及び下林柳瀬線街路改良事業に伴う埋蔵文化財調査として、平成11年度に坂口遺跡、石清水遺跡の発掘調査を実施しました。

菊池郡泗水町大字田島に所在する坂口遺跡では古代の道路様遺構の一部が検出されました。また、人吉市願成寺町字上の寺に所在する石清水遺跡では中世の坏を伴う土坑等が検出されました。

本報告書が埋蔵文化財とその保護に対する理解と認識を深め、活用していただく一助となれば幸いです。

埋蔵文化財調査に際しご協力いただきました熊本県土木部道路建設課・都市計画課、熊本県菊池地域振興局土木部・同球磨地域振興局土木部をはじめ、地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成13年3月31日

熊本県教育長 田 中 力 男

例　　言

- 1 本書は、主要地方道熊本菊鹿線單県道路改良工事に伴い事前に実施した埋蔵文化財調査（坂口遺跡）、及び下林柳瀬線街路改良事業に伴い事前に実施した埋蔵文化財調査（石清水遺跡）の報告書である。
- 2 坂口遺跡の調査は熊本県土木部道路建設課から、石清水遺跡の調査は同都市計画課から依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。
- 3 当該遺跡の発掘調査は平成11年度に実施し、その整理・報告書作成は平成12年度に行った。
- 4 本書は2部構成をとり、第Ⅰ部を坂口遺跡、第Ⅱ部を石清水遺跡とした。
- 5 現地での実測及び写真撮影は後藤貴美子、水上仁が行った。遺構の製図は横山明代が、遺物の実測は下東嘉也、後藤が、遺物の製図は横山が行った。遺物の撮影は後藤が行った。
- 6 坂口遺跡の地形図は泗水町から、石清水遺跡の地形図は人吉市から提供を受けたものをもとにして作成した。
- 7 本書の執筆は後藤が行った。ただし第Ⅰ部・第Ⅱ部の第Ⅱ章第1節は村崎孝宏が主として行った。
- 8 本書の編集は熊本県文化課が行い、後藤が担当した。

凡　　例

- 1 現地での実測図は以下の縮尺で作成した。
ビット・断面…1/20　　土坑…1/10　　遺構配置図…1/100
- 2 本書の作成の際には以下の縮尺とした。
ビット・断面…1/60　　土坑…1/15　　遺構配置図…1/300
土器…1/3
- 3 遺構の方位は真北である。
- 4 写真のスケールは紙面の都合で任意とした。
- 5 各部第Ⅱ章で示した周辺主要遺跡分布図及び主要遺跡名については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会）と同様の番号を付した。市町村コードにあたる3桁の数字に対応する市町村は下記の通りである。
第Ⅰ部　坂口遺跡　210…菊池市、385…鹿本郡植木町、401…菊池郡七城町、405…同郡合志町、
406…同郡泗水町、407…同郡西合志町
第Ⅱ部　石清水遺跡　203…人吉市、501…球磨郡錦町、510…同郡相良村、512…同郡山江村、
513…同郡球磨村
- 6 その他の凡例については挿図ごとに付した。

序文

例言・凡例

本文目次

第Ⅰ部 坂口遺跡

第Ⅰ章 調査の概要

　　第1節 調査の経緯.....1

　　第2節 調査の方法と経過.....1

第Ⅱ章 遺跡の概要

　　第1節 地理的環境.....3

　　第2節 歴史的環境.....6

　　第3節 遺跡の層位と包含層.....7

第Ⅲ章 調査の成果

　　第1節 遺構.....12

　　第2節 遺物.....12

第Ⅳ章 まとめ.....23

第Ⅱ部 石清水遺跡

第Ⅰ章 調査の概要

　　第1節 調査の経緯.....25

　　第2節 調査の方法と経過.....25

第Ⅱ章 遺跡の概要

　　第1節 地理的環境.....27

　　第2節 歴史的環境.....30

　　第3節 遺跡の層位と包含層.....31

第Ⅲ章 調査の成果

　　第1節 遺構.....33

　　第2節 遺物.....33

第Ⅳ章 まとめ.....40

報告書抄録

図版

挿図目次

第Ⅰ部 坂口遺跡	第17図 遺物実測図（2）	21
第1図 周辺地形図	第18図 遺物実測図（3）	22
第2図 周辺地形略図		
第3図 坂口遺跡周辺主要遺跡分布図	第Ⅱ部 石清水遺跡	
第4図 土層模式図	第1図 周辺地形図	26
第5図 東側土層断面図（1）	第2図 周辺地形略図	27
第6図 東側土層断面図（2）	第3図 石清水遺跡周辺主要遺跡分布図	28
第7図 西側土層断面図（1）	第4図 土層断面図	32
第8図 西側土層断面図（2）	第5図 遺構配置図	34
第9図 ピット内出土遺物実測図	第6図 1号土坑実測図	35
第10図 遺構配置図	第7図 1号土坑出土遺物実測図	35
第11図 道路状遺構第1面	第8図 構造遺構	36
第12図 道路状遺構第2面	第9図 ピット状遺構配置図（1）	37
第13図 道路状遺構第3面	第10図 ピット状遺構配置図（2）	38
第14図 道路状遺構第4面	第11図 ピット状遺構配置図（3）	39
第15図 ピット状遺構・不明遺構配置図		
第16図 遺物実測図（1）		

表目次

第Ⅰ部 坂口遺跡	第Ⅱ部 石清水遺跡	
第1表 坂口遺跡周辺主要遺跡地名表	第1表 石清水遺跡周辺主要遺跡地名表	29

図版目次

図版1 坂口遺跡

- 1 道路状遺構第1面
(B C グリッド周辺、南から)
- 2 道路状遺構第2面
(C グリッド周辺、南から)
- 3 道路状遺構第2面
(D E グリッド周辺、南から)
- 4 作業風景

図版2 坂口遺跡出土遺物

図版3 坂口遺跡出土瓦及び参考資料

- 1 坂口遺跡出土布目瓦
- 2・3 岡遺跡出土布目瓦（参考資料）
- 4・5 田島廃寺出土布目瓦（参考資料）

図版4 石清水遺跡

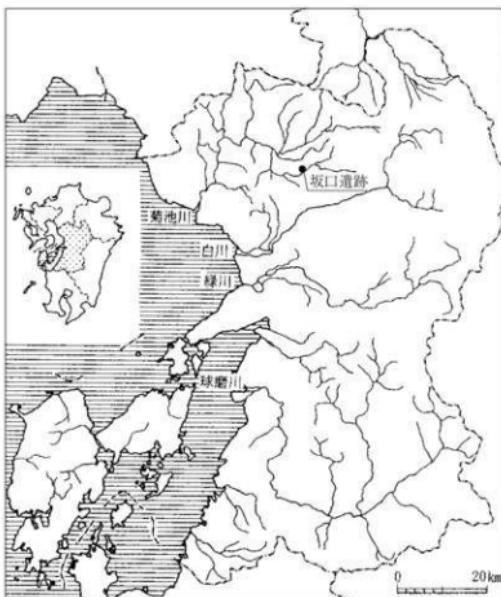
- 1 全景
- 2 ピット断面（北壁）
- 3 ピット断面（部分）

図版5 石清水遺跡

- 1 作業風景
- 2 1号土坑遺物出土状況
- 3 1号土坑出土遺物

さかぐち
第Ⅰ部 坂口遺跡

—主要地方道熊本菊鹿線単県道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査—



第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の経緯

菊池土木事務所から熊本県教育庁文化課に対し、平成10年1月6日付けで埋蔵文化財の調査依頼がなされた。主要地方道熊本菊鹿線單車道路改良事業に伴うものである。これを受けて同年1月26日に第1次試掘調査を行った。

第1次試掘調査では、2つの工区に合計12のトレチ（試掘坑）を設定し、調査を実施した。その結果、溝や柱穴が確認された。また、周辺の耕作土中にも土器が散布しており、遺跡が所在する可能性が高く、本調査が必要である旨通知した。

さらに、同年6月10日第1次試掘調査で調査が必要であると回答した箇所と隣接する場所で第2次試掘調査を行った。トレチからは土器片が数点検出され、周辺の地形と遺物包含層（遺物が含まれる堆積層）の残存状況から埋蔵文化財が存在するものと判断し、その旨回答した。

これらの結果を受けて菊池土木事務所と熊本県教育庁文化課との間で協議を重ね、本調査が必要であると回答した約200m²の範囲について発掘調査を平成11年度に実施することとし、平成11年7月7日に開始し平成11年8月6日に終了した。調査期間は1ヶ月である。

第2節 調査の方法と経過

発掘調査は、歩道拡幅部分についての実施であり、幅約2m、長さ約100mと狭長である。そこで調査区北側に任意に基準点を設定し、10mごとにA～Fのグリッドの設定を行った。なお、A区より北側は表土下に遺物包含層が残存せずロームが露出する状況であり、またF区より南については擾乱等により調査対象外とした。

調査区の幅が狭く、中央から南にかけては旧道の側溝が露出したため最も狭いところでは50cmの幅

で検出することとなった。また調査区の東側は畠地、西側は道路にあたるため土圧も考慮して法面をつけて掘り下げを行った。このように、発掘調査の実施にあたっては、調査区が比較的交通量の多い道路と平行しているため、安全には充分に留意し実施した。

○調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

■発掘調査（平成11年度）

調査責任者 豊田貞二

（首席教育審議員兼文化課長）

川上康治（課長補佐）

調査総括 島津義昭（課長補佐）

江本直

（主幹兼文化財調査第2係長）

調査担当 後藤貴美子（文化財保護主事）

水上仁（嘱託）

調査事務 小斎久代（総務係長）

廣瀬泰之（参事）

川口久夫（主事）

■報告書作成（平成12年度）

調査責任者 阪井大文（文化課長）

川上康治（課長補佐）

調査総括 島津義昭（課長補佐）

江本直

（主幹兼文化財調査第2係長）

調査担当 後藤貴美子（文化財保護主事）

横山明代（嘱託）

調査事務 中村幸宏（主幹兼総務係長）

廣瀬泰之（参事）

杉村輝彦（主事）



第1図 周辺地形図 (1:5,000)

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

坂口遺跡は熊本県菊池郡泗水町に所在する。同町は県北に位置し、町の中央には合志川が東西に貫流している。合志川は菊池川の支流で、西に隣接する植木町に入ったところで北に大きく向きを変え、菊池川と合流する。

合志川右岸（北側）には菊池郡旭志村から同郡泗水町にかけて花房台地が、左岸（南側）には同郡大津町から同郡西合志町にかけて合志台地が広がっている。両台地とも畑作を中心であるが、合志川流域の低位段丘では水田耕作が行われている。

本遺跡は、花房台地の西南端に位置する。花房台地は阿蘇外輪山西麓から西方に発達した菊池台地（菊池郡内および周辺の台地の総称）の一角であり、標高約70～100mの洪積段丘上にある。

花房台地および合志台地は、阿蘇の大規模な火山活動による多くの噴出物が広範囲に堆積し形成した

ものである。そのため同台地は、火山灰土壌であり透水性が強く、雨水は地下に浸透し地表の流水が少ないので比較的起伏の少ない傾斜の緩やかな地形を形成している。

遺跡付近は、上位段丘面から一段低くなってしまい、調査区自体も台地から河川周辺の沖積低地へ移行する、緩やかな斜面となっている。

調査区は南北に長い帯状を呈しながら北から南へと傾斜しており、約2%の勾配率となっている。東側には段々に築成された平坦面があり、西側は谷部に向かって東側よりさらに低くなっていく。また、北西約200mには微高地があり、その麓には湧水池がある。

一方、行政区画で見ると泗水町は北を菊池郡七城町、菊池市、東を旭志村、南を合志町、西合志町、西を鹿本郡植木町とそれぞれ接している。遺跡の位置する大字田島は町の西部にあたり、植木町や西合志町と接する地域となっている。



第2図 周辺地形略図



第3図 坂口遺跡周辺主要遺跡分布図 (1:50,000)

第1表 坂口遺跡周辺主要遺跡地名表

遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	種 別	断 定	施 方
210/040	木船子・タツカ吉塙	木船子 下原里	弥生・古代	古墳	第	西に向南後門墳、黒松石定石入り(複数)
210/071	他雲山青塚寺跡	他雲山	中世	笠塚	市	有日瓦・土師器・須石器・瓦片出土
210/083	兔の城跡	北京 城の堀り	弥生・古代	城	市	別名北之尾城跡、須石器・瓦片出土
210/090	木船子・タツカ吉塙内跡	木船子 下原里	古墳	古墳	大井	見
210/095	今寺野家及び上原跡	今寺 (通称高田) 古代・中世	荒廃地	市	有日瓦・土師器	西に向南後門墳、黒松石定石入り(複数)
210/098	西寺	西寺 (通称高田) 古代・中世	荒廃地	市	有日瓦・土師器	西に向南後門墳、黒松石定石入り(複数)
210/087	西寺	西寺 南向	古代・中世	荒廃地	市	有日瓦・土師器
210/088	瀬川城跡	瀬川の古町 瀬の堀	中世	城	瀬	瀬
210/089	兔の跡跡	瀬川	中世	荒廃地	市	有日瓦・土師器
210/090	赤星城跡・水塚	赤星 楊上・木船	縄文・古代	集落	市	十八外城の一つ
210/093	古池城跡	古池	中世	城	市	十八外城の一つ
210/095	丁子山塚古墳群	丁子山	中世	分社	城	市
210/120	日輪城跡	今 街ノ上	中世	古墳	市	古墳
210/155	木船子・吉塙古墳群	木船子	古墳	古墳	市	古墳
210/156	西原 B	木船子	古墳	古墳	市	古墳
210/159	昭山ノトト	木船子	古墳	古墳	市	古墳
210/164	象形跡	木船子	古墳	古墳	市	古墳
210/162	象形跡	木船子	古墳	古墳	市	古墳
210/163	象形跡	木船子	古墳	古墳	市	古墳
385/024	大蛇城跡	田底 八郎丸	中世	城	町	五輪塔
385/040	伊加野村	伊加野 道・大村	縄文・古代	荒廃地	(11月) 伊加野遺跡、網文・石器・石器・土器・平安御正器・瓦礫・手すり鉢	
385/034	蟹屋	伊加野 蟹屋	弥生・古代	荒廃地	蟹屋	平安御正器・土器
385/022	今寺城跡	今寺	古墳	古墳	市	被穴式15基
385/033	豆付村	豆付	古墳	古墳	市	平安御正器・土器・輪谷器・青釉・藏谷器・白釉滑耳瓶出土
385/036	鹿島古墳	鹿島 天保川	古墳	古墳	市	前方後円墳・宝鏡
385/004	上の原跡跡	上の原 田の原	中世	城	加茂城・城山城	
385/006	岩野神跡 (道祖神)	岩野 (城山) 馬場	中世	城	町	(羽林) 看守城跡・城山・曲輪・土塁
385/009	白石	白石	縄文・古代	荒廃地	御山ノ上	瓦礫・土器・輪谷・平安御正器・土器
385/100	小畠	有室 小畠	縄文・古代	荒廃地	愛和村	愛和村
385/101	右川	右川 小畠	縄文・古代	荒廃地	弘前土器・輪谷・六角瓶型壺・土器蓋・平安御正器・人面承持	
401/021	日置寺田寺跡	日置寺 田手	中世	寺社	町	日置寺・寺社・神宮司日置連棲と云う
401/023	加志城跡	加志 水木本	中世	城	町	別名正志古墳
401/024	西原城跡	西原 宮ノ森	中世	城	町	七城の一つ・西原氏代の居城・別名増水城跡
401/030	打糸城跡	打糸	中世	城	町	七城の一つ・林原氏代
401/034	庵原城跡	庵原 下削迫	中世	城	山	山噴出丘利用・公園化・別名山越城跡
401/037	上鷹頭	小野原 上鷹頭	古代	官署	町	
401/038	四面寺社	四面 烏田	古代	荒廃地	町	日置瓦
401/039	鬼丸	日置 鬼丸	縄文・古代	荒廃地	町	別名鬼丸古墳
401/040	大久坂	林原 大久坂	縄文・古代	荒廃地	町	日安集落跡
401/042	龜尾城跡	龜尾 城平	中世	城	町	別名龜尾八十六城の一つ・鹿野寺跡中心
401/045	初留毛王寺跡	初留毛 城子	中世	寺社	町	
403/006	丁戻城跡	丁戻 城山	中世	城	町	
404/005	洞 A	田島 北原	古代・中世	荒廃地	山田瓦	
404/006	洞の櫻古墳	田島 阿毛地	古代・中世	荒廃地	山田瓦	
404/007	洞 B	田島 北原	古代・中世	荒廃地	布目瓦	
404/010	田島城跡	田島 門口	古代	寺社	上・下御山・須志器	
404/013	隣城	田島 隣家	古代	荒廃地	藏骨器・須志器	
404/019	安国寺跡	豊木	古代・中世	荒廃地	瓦器・青釉	
404/021	油家長井茶也跡	豊木 中原	古代・中世	荒廃地		
404/022	安国寺	豊木	中世	寺社	町野定軒像跡・京町塚	
404/023	久米城跡	豊木 高畠	中世	城	別名高木城跡	
404/027	三万円古墳	豊木 古原	縄文	荒廃地	縄文瓦器・羽扇形器・往日土器・十脚・石器・陶器・筒瓦	
406/029	吉原古跡 B	吉原 古原原	縄文・古代	荒廃地		
406/033	村吉	吉原 高魚	古代	荒廃地	藏骨器・須志器	
406/034	吉原分ケト石	吉原 北原	古代	石造物	心臓	
406/037	平町	吉原 手原	古墳・中世	荒廃地	土蜘蛛・滑石器	
406/042	中移山	榎本 中移	中世	荒廃地	古洛研磨器あり	
406/045	鬼木賀武跡	水 猪坐	古代・中世	荒廃地	瓶	
406/046	かんじこ立塚	水 猪原	中世	寺社		
406/047	富中・無色糞さん	富中 大原	中世	寺社		
406/049	中移城跡	榎本 富中	中世	城		
406/056	嵐山	佐古 嵐山	縄文・古代	荒廃地	藏骨器・須志器・御器式・西平式・跨足式・青磁	
406/057	疾患城跡	佐古 嵐山	中世	城		
406/058	佐吉ノ神社	佐古 北小路	古墳・中世	荒廃地	須志器・土蜘蛛・滑石器	
406/060	山王宮跡	佐古 古岡	古墳・中世	荒廃地	土蜘蛛・滑石器	
406/066	猪上城跡	佐古 古岡	中世	城		
406/070	日頭山古跡ひ跡	佐古 猪上	中世	寺社	仏像	
406/072	光明寺跡	佐古 小北路	古代・中世	寺社		
406/074	多和跡					
406/077	羽舞田		古墳・古代	荒廃地		
406/079	坂口	田島 沼口	古代・中世	荒廃地	赤村瓦	
407/007	鳴方寺跡	上生 坡	中世	寺社		
407/008	上原	上生 坡	縄文・古代	荒廃地	須志器・土蜘蛛・高石器・圓筒器	
407/009	城塚	上生 坡	縄文・古代	荒廃地	上向器坏・兜木墓室	
407/010	猪吉城跡	上生 猪崎	中世	城		
407/012	アミダノ	野々島 古岡・麗・麗原	縄文・古代	荒廃地		
407/013	延命寺	野々島 古岡	縄文・古代	荒廃地		
407/014	風船	野々島 風船	縄文・古代	荒廃地		
407/022	アソンド	上生 沖原	弥生・古代	荒廃地		
407/023	同原	合生 同原	縄文・古代	荒廃地		
407/036	高木原	合生 高木	縄文・古代	荒廃地	織文後期・金糞時代高木原大量	
407/037	合志惣家神龜堂宝塚	合生 吉志寺	古代	荒廃地		
407/038	卫達寺跡	合生 王達寺	中世	寺社		

第2節 歴史的環境

1 繩文時代

花房台地上には、縄文時代の遺跡が多く残る。特に縄文時代後・晚期の遺跡が目立ち、著名な遺跡が多い。泗水町三万田東原遺跡は後・晚期の集落で、出土した土器は「三万田式土器」としてこの時期の指標の一つとなっている。

2 弥生時代

菊池川とその支流域には弥生時代の集落も多く確認されており、大規模な環濠集落である山鹿市所在の方保田東原遺跡は国指定となっている。また菊池川・支流に沿って壺棺や石棺などの埋葬地も多い。

3 古墳時代

合志川左岸の丘陵地（現植木町周辺）では植木町高熊古墳や県指定の同今藤横穴墓群など多くの古墳群・横穴墓群がつくられる。

また菊池市木柑子高塚古墳、木柑子フツカサン古墳は古墳時代から古代にかけての在地勢力を推し量る上で貴重な遺跡となっている。

4 古代

坂口遺跡では古代から中世にかけての遺物が出土しているので、特に詳しく触れてみる。

鹿本郡から菊池郡にかけての盆地や菊池川が形成する沖積低地には条里制が比較的残っていることが特筆される。泗水町内でも三十六、十九、六ノ坪、など条里制があったことを示す地名が残されている。

律令制度のもとでの地方行政は、国一郡一郷一里という綱のラインで細分化されており、国の長を国司、郡の長を郡司、郡司の役所を郡衙、郡衙のある集落を郡家といった。郡衙の近くに国分寺・国分尼寺が建てられたように、郡衙の近くにも寺院が建てられた。

律令制下の郡家所在地に比定されているところとしては菊池郡の郡衙関連の遺跡としては菊池市西寺遺跡、十蓮庵寺跡などが、山鹿郡の郡衙に関する遺跡では桜町遺跡、中村庵寺、御宇田妙見遺跡などがある。

遺跡の所在する泗水町大字田島は現在菊池郡であるが、江戸時代以前は合志郡に属していた。合志郡

は貞觀元（859）年に東を合志郡、西を山本郡に分割された。分割以前の郡家は泗水町北住吉の住吉神社境内とみられているが、その後田島に移転したと考えられる。又、田島庵寺は郡家に伴う郡寺と比定され、坂口遺跡の南南東、約200mの位置にある。調査を行った松本雅明氏は遺物の状況などから田島庵寺の存続時期を平安中期（10世紀末～11世紀初め頃）とし、出土した瓦が單弁八弁蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦の一組であることなどから5、60年の短い期間に廃絶したものと推定している。

また、遺跡の約1.6km北に位置する七城町上鶴頭遺跡ではコの字形に配置された掘立柱建物17棟が検出されたほか、60点余りの墨書き土器などが出土している。9世紀前半の短い期間に存続したと考えられ、郷に設置された郡倉、あるいは合志郡の郡衙と見られている。

坂口遺跡の北西約300mのところに岡遺跡がある。ここも以前から田島庵寺と同様古代の布目瓦の散布が知られていたところであるが、見つかった瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の一組で、田島庵寺出土の瓦の文様とは違いがあり、岡遺跡で焼かれた瓦が田島庵寺に供給されたのかどうかは断定できていない。出土遺物の時期は平安時代中期に比定されている。

5 中世

坂口遺跡では青磁も数点出土している。周辺の当該時期の遺跡としては七城町打越城、同龜尾城、泗水町久米城などの中世城のほか、現在の菊池市隈府を拠点に活躍した、中世の武士団の長である菊池氏関連の遺跡や寺院（跡）、塔碑なども多い。岡遺跡周辺でも中世の遺物が採集されている。

遺跡一帯の「田島庄」は平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて成立したと見られており、田島村としては当初合志川に隣接した場所にあったが、加藤清正の新井手開削にともない現在の場所に村移りがなされたという。

第3節 遺跡の層位と包含層

坂口遺跡は北から南へ傾斜している。調査区の北側は南北に切りとおし状に削平されており、表土を剥ぐとすぐ黄褐色でやや粘性を帯びるローム層が露出する。また、調査区の南側では、土層の堆積が厚くなっている。

したがって、各場所での土層を概観すると北側では薄く、南は厚く堆積しており、標準的な土層を呈示することは難しい。なお、第4図にない層位については第5～8図中にある。

I層

表土。古代の遺物を含む。

II層

暗褐色土。混入物としまり具合によって分層することが可能である。土師器、須恵器、青磁、陶磁器等、縄文時代～近世までの遺物を含む。

III層

黒褐色土。しまりは弱い。ところにより黄色粒が微量混じる。

土師器、須恵器等主に古代～中世の遺物を含む。

IV層

暗褐色土。部分的にしまりの強い箇所と弱い箇所がある。大きく2層に分層することが可能である。弥生時代の土器も混じるが、土師器、須恵器等、主に古代～中世の遺物を多く含む。

IV a層 ややしまる。

IV b層 しまりやや弱い。

V層

全体として黒褐色土。硬化面としまりの弱い層が交互に重なる層である。硬化面は大きく4枚（①～④に相当）を数えることができ、それぞれの硬化面にはさまれた層を3層に分層している。須恵器、土師器等、古代の遺物を含む。

V a層 黒褐色土。しまり弱い。

V b層 暗めの暗褐色土。上下の層よりしまる。

V c層 黒褐色土。しまり弱い。

VI層

黒色土。混入物の違いから、2層に分層が可能である。縄文時代の土器が極少量含まれる。

VI a層 しまり弱い。

VI b層 VI a層よりややしまる。黄色粒（アカホヤ）を少量含む。

VII層

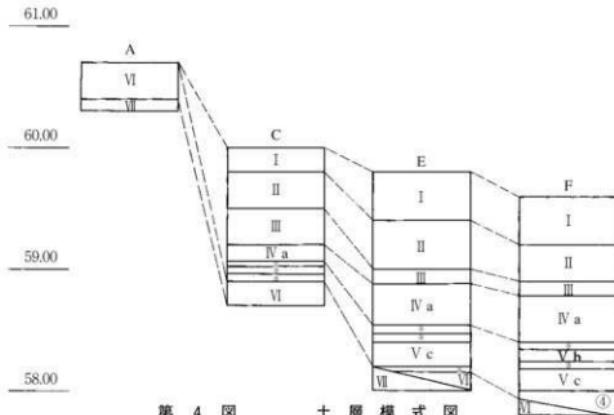
暗褐色土。粘性は強く、よくしまる。縄文時代早期の遺物等が極少量含まれる。

VIII層

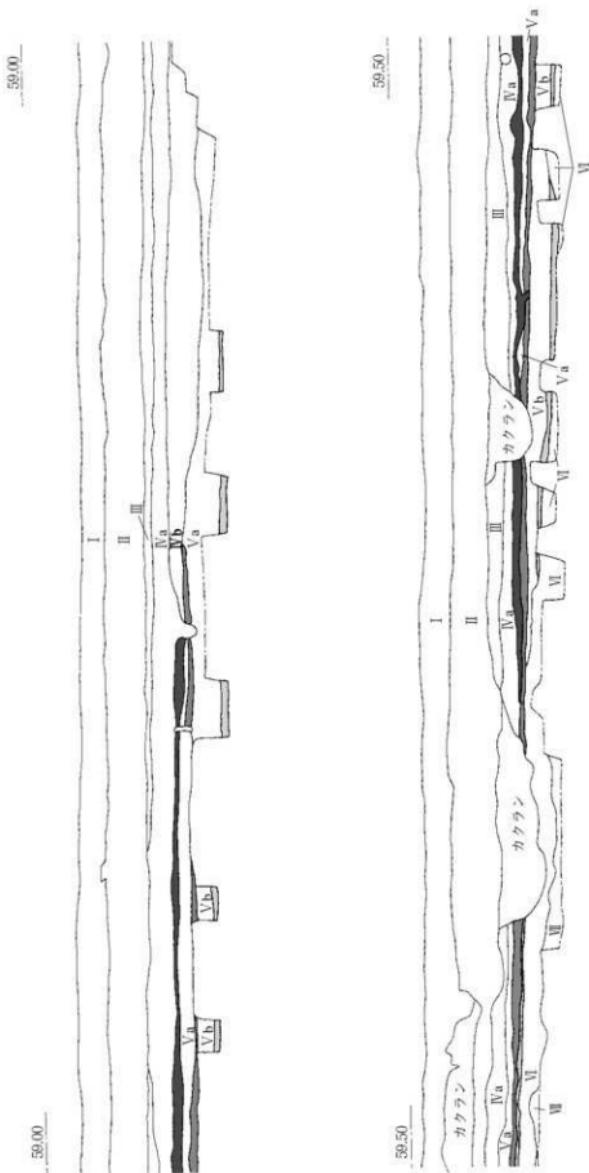
淡黄褐色土。粘性は強く、よくしまる。遺物は含まれない。

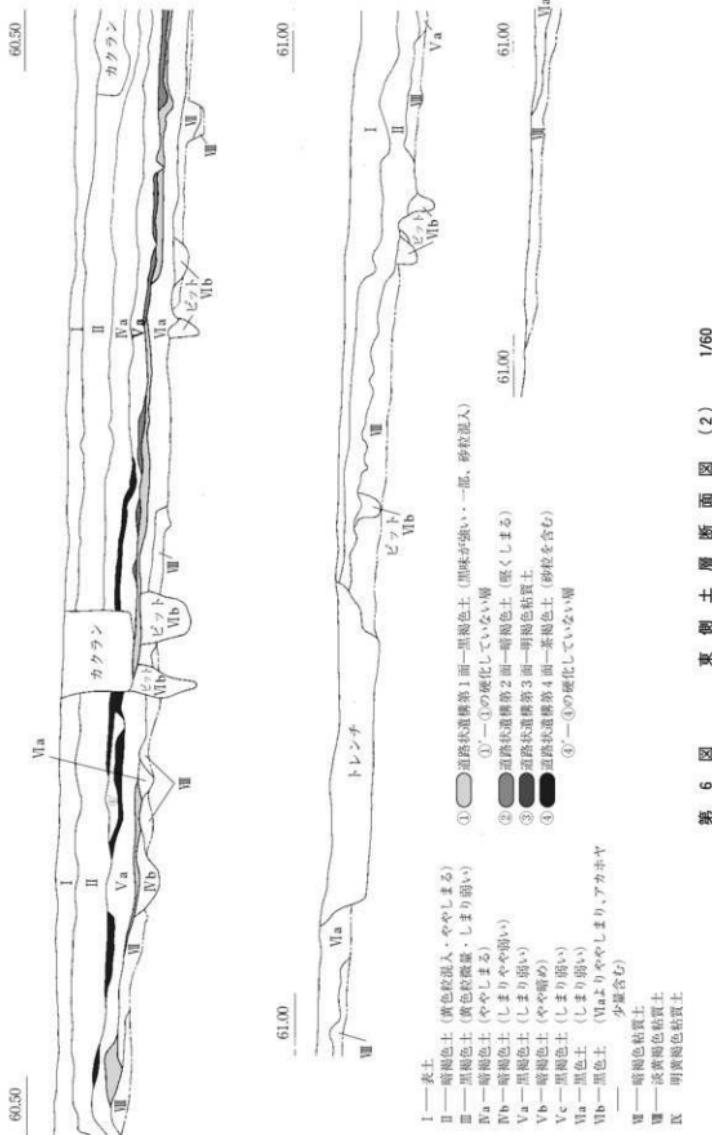
IX層

明黄褐色土。粘性は非常に強く、VII層よりしまりは弱い。遺物は含まれない。ローム層。



第5図 東側土層断面図(1) 1/60





第7図 西側土層断面図(1) 1/60





第Ⅲ章 調査の成果

第1節 遺構

1 不明遺構について

幅は約1mで溝状を呈し、ほぼ東西方向にはしる。埴層（ローム）を掘りこんでつくられており、地山がすりばち状に硬化する。遺物は伴わず時期は不明であるが、2の道路状遺構の下位にあり、VI b層が堆積していることとその硬化の状況から、平安時代前期より以前に道として使用されていた可能性も考えられる。

2 道路状遺構について

調査区北側から掘り下げていく過程で硬化面を検出し、当初は住居の床面のみ残存しているものかと考えられた。しかし硬化面が連続して検出されることがわかり、道路状遺構としてとらえることが適切であると考えた。ただし、後述のとおりこれらの硬化面を道路であると断定するにはいたらなかった。

硬化面の方向は、現在の道路の軸方向から西側に約10度ずれ、ほぼ南北に沿った軸となる。調査区の幅が1mにも満たないほどせまく、かつ調査区とはほぼ平行して検出されたため、正確な遺構の幅はわからない。単純に、東西の遺構の端を真っ直ぐに延長させてあえて復元を試みるならば、その推定幅は約4~6mとなる。

遺構の全体像を把握しながら掘り下げていくことができなかつたため、一定のグリッドごとにトレチを入れながら硬化面を確認し、最終的に東西両壁の断面をもとに平面形を復元する方法をとった。その結果、図化したものが第11図から第14図までの4枚の硬化面である。

4枚の硬化面の、下位から順に第1硬化面、第2硬化面、第3硬化面、第4硬化面と数える。明確に分層できるところもあればあいまいな箇所もある。第1硬化面から第4硬化面までの顯著な時期差はみられない。また、両側に溝を掘ったり、路面を故意に掘りくぼめたり、人為的に土砂をつき固めた痕跡はうかがえない。

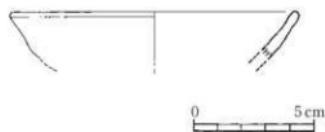
硬化面はC~Eのグリッド付近に集中しており、特に硬化の激しい箇所は1層の厚みが5cmほどある。特にDグリッド周辺では、ほぼ同質の土層で固くしまる層とそうでない層が交互に堆積している。同じ面が道路として使用される過程において、谷部（南）の方により多くの土が流れ、自然に高低差が少なくなっていたと考えられる。

第IV章で詳しく述べるが、遺構の時期は周囲の歴史的環境と出土遺物から、9世紀から10世紀にかけての限られた時期と思われる。

3 ピット状遺構について

第15図はピット状遺構の配置図である。明確に建物を復元できるような、規則的な配列は見られず、柱の痕跡もない。樹根である可能性もあるが、人為的なものである可能性も捨てがたかったため図化した。

ピットの法量は直径15.0~44.0cm、深さ15.0~58.9cmである。うち1基のピットから遺物が出土した。第9図は土器器の壺の口縁部で、復元口径は11.2cmである。

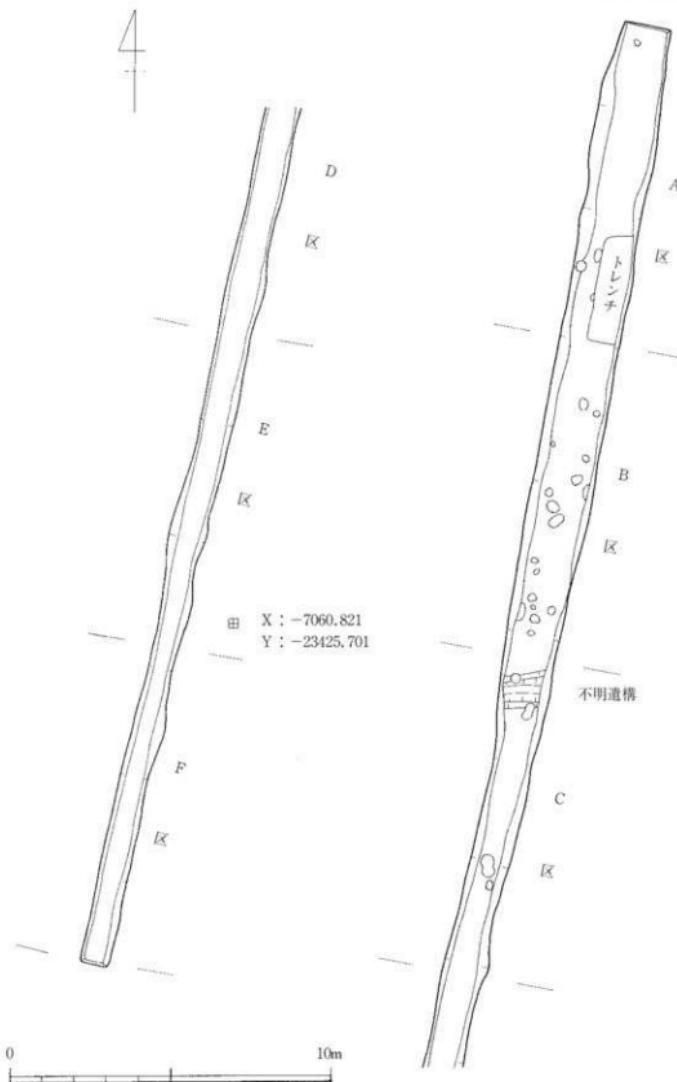


第9図 ピット内出土遺物実測図

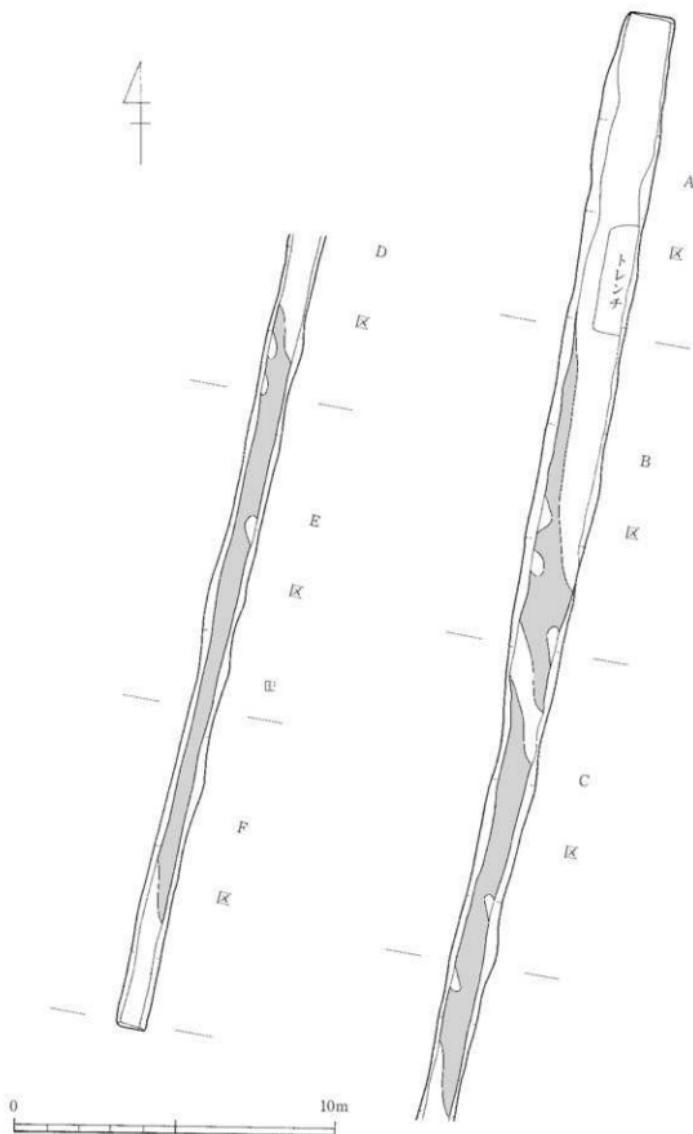
第2節 遺物

本調査では、調査に伴って掘り下げていった土層全体が遺物包含層であり、それぞれの層に含まれる遺物にも時期差があった。本来なら各層においてその層がいつの時代のものであるかを示す遺物を掲載すべきであるが、本報告では大まかに（1）古代の遺物（2）中世の遺物（3）V層の遺物（4）その他の時期の遺物と分けて記載することとした。

X : -7050.821 m
Y : -23375.701



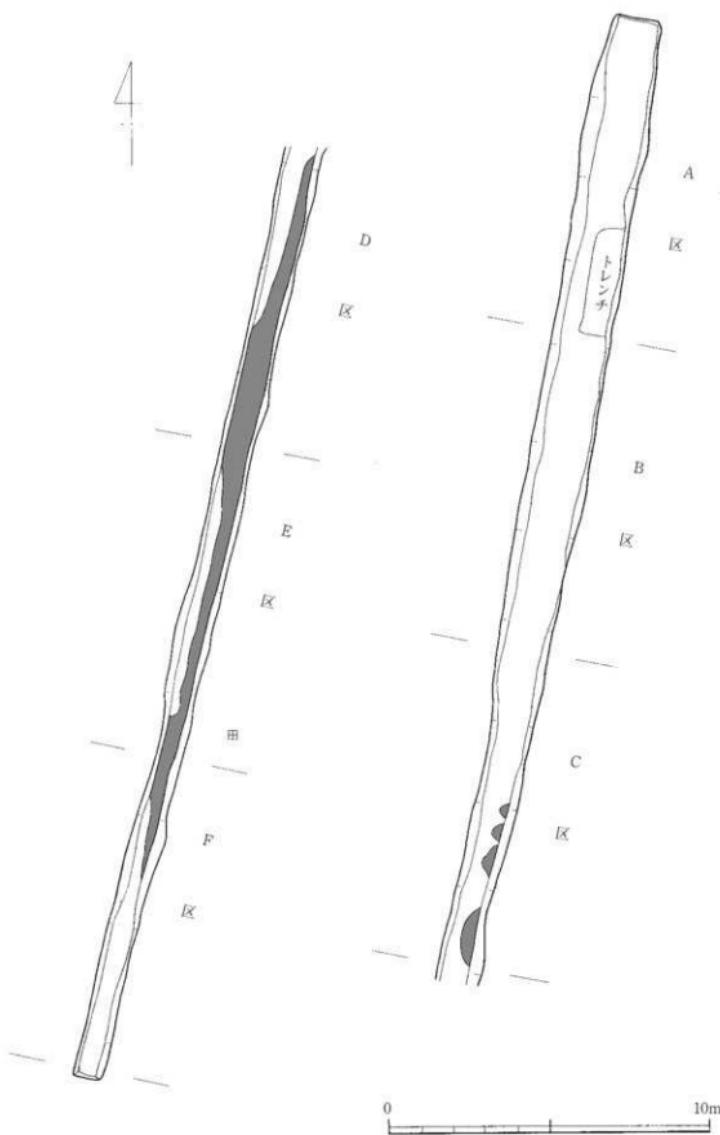
第 10 図 遺 構 配 置 図



第 11 図

道 路 状 遺 構

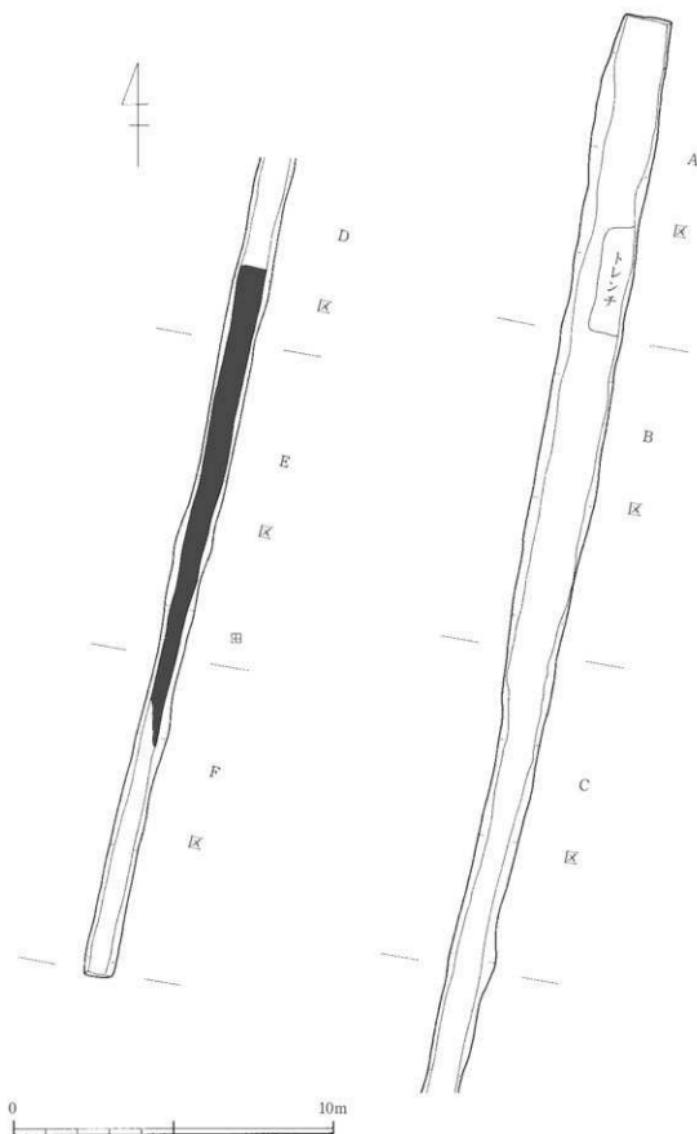
第 1 面



第 12 図

道 路 状 遺 構

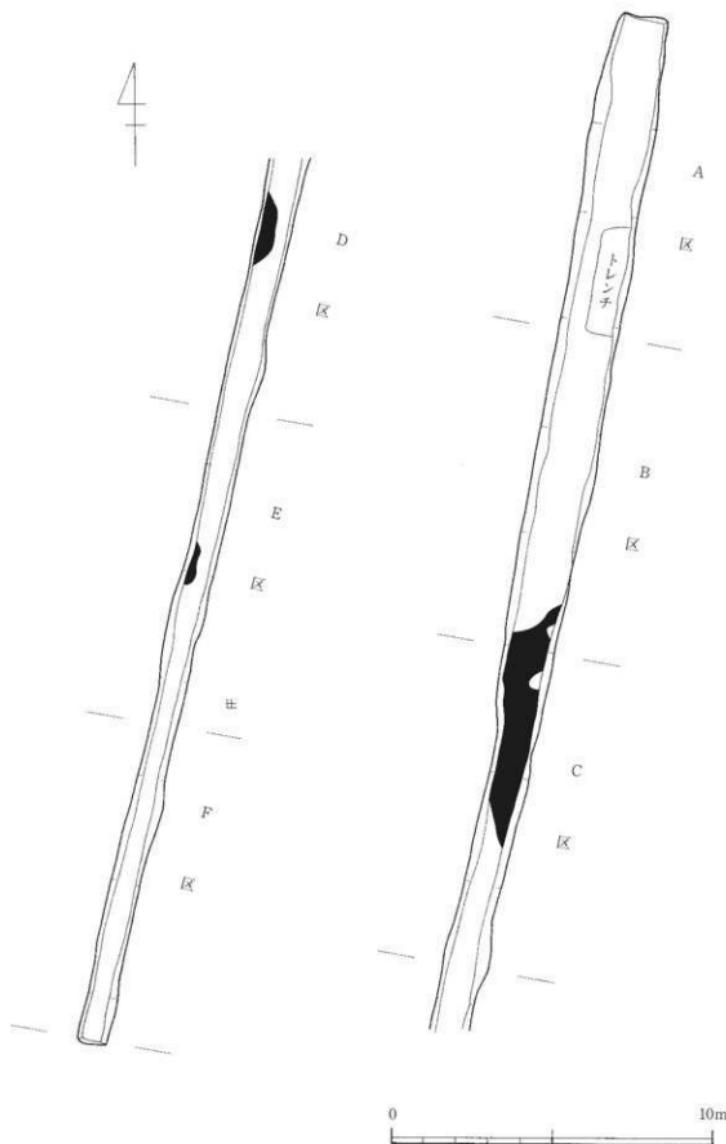
第 2 面



第 13 図

道 路 状 遺 構

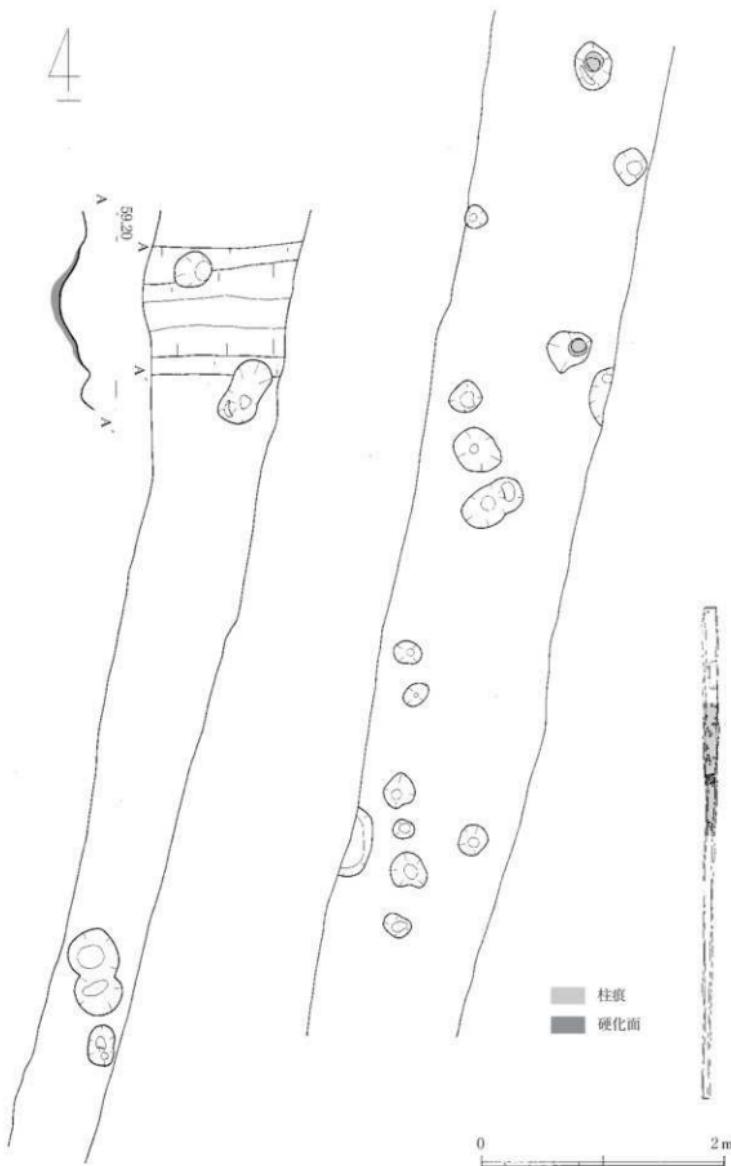
第 3 面



第 14 図

道 路 状 遺 構

第 4 面



第 15 図 ピット状遺構・不明遺構配置図

その理由は、本調査区は面積も狭く遺物の出土量も多くなかったため、周囲の歴史的環境を把握する事が遺跡の性格を明らかにできる方法として有効であると考えたからである。また、全ての遺物が小片であり、厳密に時期を特定することが困難だったため、その中から図化に堪え得るものを見抜き出さざるを得なかった。

遺跡の主な時代が古代と中世にしばられるため、以下古代と中世の遺物を中心に述べていきたい。

また、道路状遺構の時期を判断する材料として、V層については分けて記載した。第16・17図は古代の遺物を、第18図は中世の遺物とV層出土の遺物を、そしてその他の特記すべき遺物として1点を図化している。

1 古代の遺物

1~13は須恵器である。全体的に焼成は良好であるが、還元がうまくなされていないためか土師器のような、赤みを帯びた焼成になっているものも多い。

1は壺で、内面はかすかに赤く変色（以下、赤変）する。2~5は壺の口縁部である。2は内外面が赤変し、焼成はやや不良である。3は外面に黒っぽい釉がかかる。4は磨滅が激しいため、調整は観察できない。5は胎土にやや大きめの砂粒が微量混じる。6~8・10は壺の底部である。9は蓋で縁辺のみ赤みがかった黒っぽい釉がかかる。11は壺で外面の突堤下部には薄く斜格子文が残る。12は壺である。内面に同心円の当て具痕、外面に斜格子文が残る。13は壺または壺の胴部である。内面の、直角部を持つ当て具痕が特徴的である。外面は赤みを帶びた黒っぽい釉がかかる。

14~28は土師器である。14~16は壺の口縁部で、15・16の外面にはわずかに赤色顔料が残る。17は壺であるが、磨滅が激しいため調整は観察できない。18・19は蓋のつまみで、18の内面には赤色顔料が残る。20~23は壺の底部である。20・22は外面に回転ヘラミガキが施される。21の底面はヘラ切りで外面に赤色顔料が残る。23は反転復元である。底部は磨滅しているが、かすかに糸切りとわかる。24~28は高台付壺の底部である。25は内面、26は外面、

28は内外面にそれぞれ赤色顔料が残る。27の底面はヘラ切りである。

29~31は布目瓦である。全体的に白っぽく風化しており、やや軟質である。29は丸瓦、30・31は平瓦である。

2 中世の遺物

32~34は土師壺皿である。34は糸切り底で、縁に微量のすが付着する。35は瓦器碗である。36は瓦質の擂鉢で、内面に斜めの櫛目がわずかに見える。37は須恵器の碗、38は須恵器の壺で、ともに反転復元している。39~41は陶磁器である。39は白磁である。40は青磁で、オリーブ色を呈し、鎬（しのぎ）連弁がほんやりとわかる。II層とIV層の結合資料である。41は青磁である。40より黄みがかった釉がかかる。中央に「金玉滿堂」の印がある。高台内と豊付を除いて全面に施釉される。高台は削りだしで高台内に砂がつく。

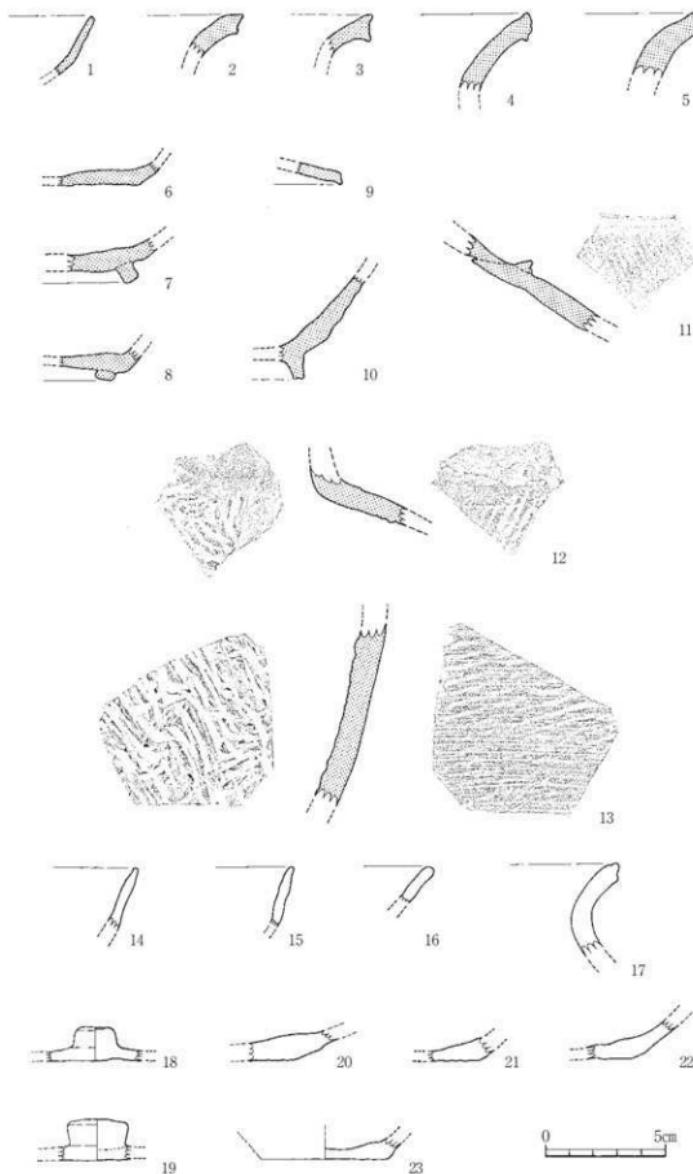
3 V層の遺物

V層は硬化面を含む層であるが、出土する遺物はII層からIV層までのものと大差はない。42~45、47は土師器である。42は壺、43・44は壺の口縁部、45は壺の底部である。46は須恵器の碗で外面はヘラで削られる。47は壺で底面はヘラ切り、内外面に赤色顔料がよく残る。

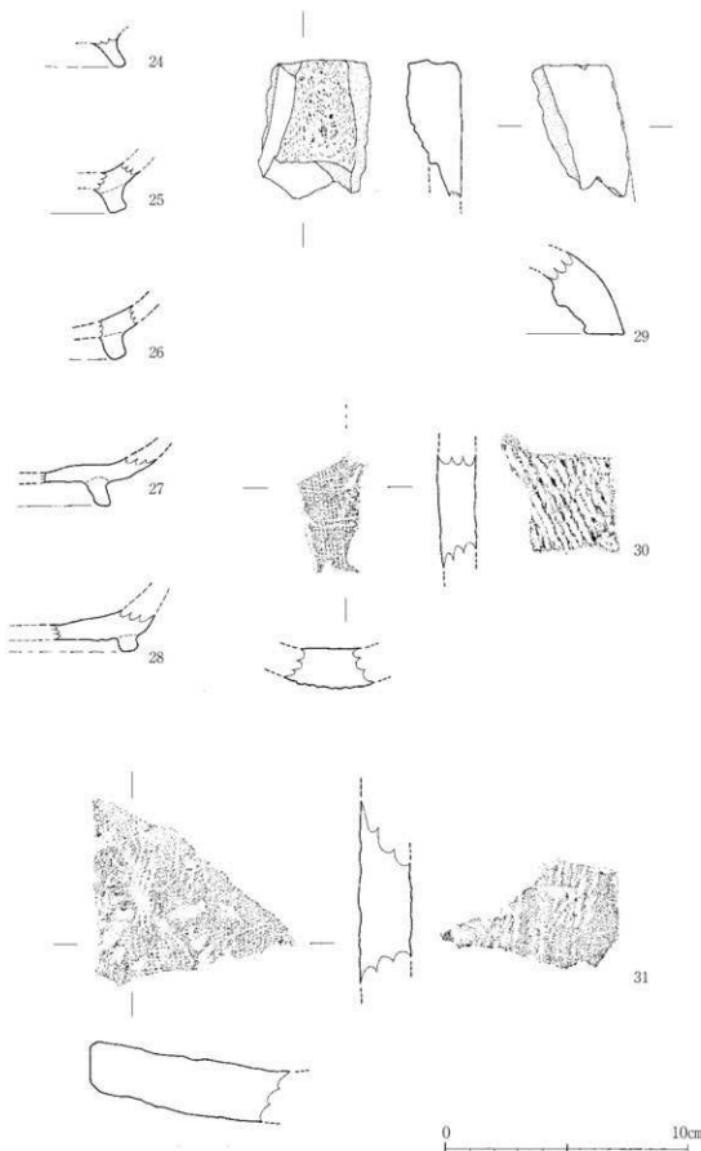
4 その他の遺物

上記に示した以外の遺物としては縄文土器片、黒耀石の剥片、弥生時代後期の特徴を持つ高壺の口縁部、壺の口縁部、壺の長脚の端部等が数点、先端が欠損した鉄鎌も1点出土している。

48は土師器である。焼成は古代のものと似ており、瓶の把手か柄杓の柄のようでもあるが、時期・用途は不明である。底面が強く押さえつけられて平になってしまっており、その面を下に向け図化したものである。

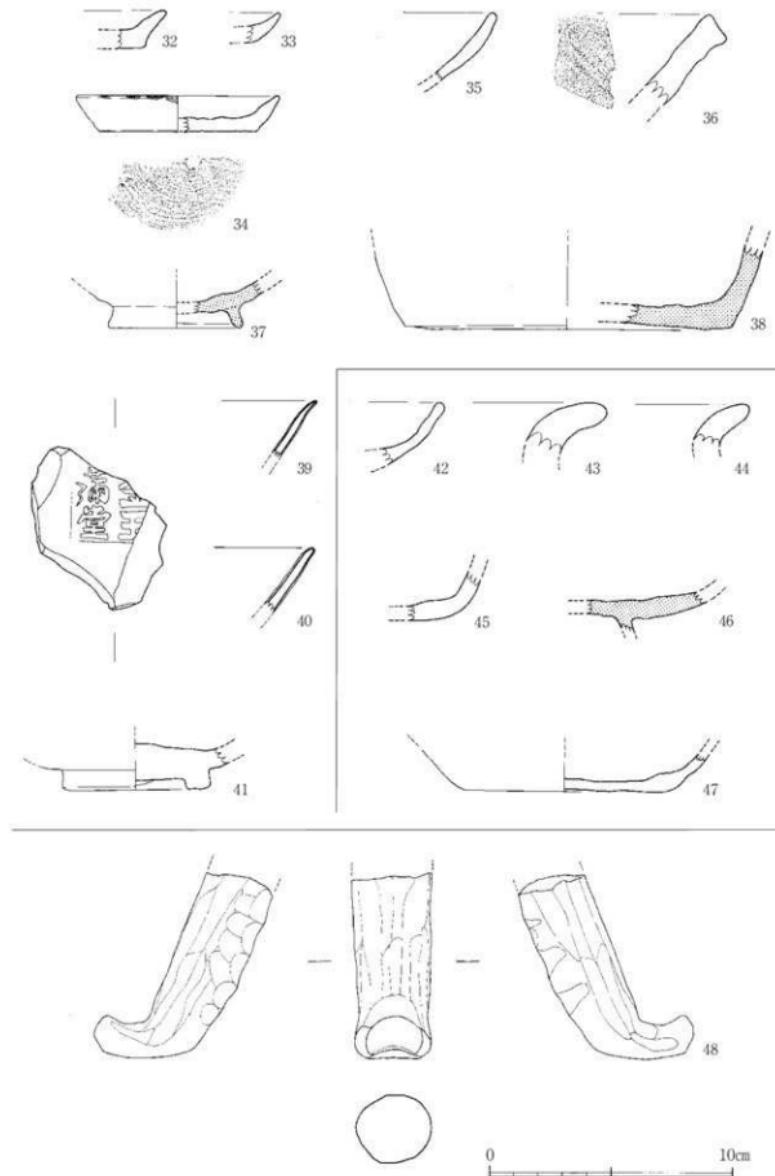


第 16 図 遺 物 実 測 図 (1)



第 17 図

遺 物 實 測 図 (2)



第 18 図

遺 物 實 測 図 (3)

第Ⅳ章 まとめ

坂口遺跡では道路状遺構と、布目瓦や青磁など古代から中世にかけての遺物が見つかった。道路状遺構は5m前後の幅が予想でき、およそ4面に分けることができるが、顕著な時期差を示すものではない。側溝や砂利などは見られないが、現道に沿うかたちである程度連続して硬化面が検出されたことからそのように判断したものである。硬化のしかたと出土遺物から、時期は平安時代中頃の限られた期間であったと思われる。

遺構全体が検出できていないため、坂口遺跡の性格を判断することは難しく、誤解を生む恐れもあるが少しでも遺跡の概要を明らかにできれば、との思いから、周辺の歴史的環境を含めて若干可能性を述べたいと思う。

1 古代の交通路について

7世紀には中央と地方を結ぶ連絡手段として駅馬・伝馬が全國に設置された。10世紀の始めに記された「延喜式」は当時の交通網を復元できる資料であるが、それによると西海道（九州）では大宰府を中心として放射状に道路が敷かれ、肥後には16の駅が置かれていたといふ。

中村太一氏は古代道路（交通制度）を大きく3種類に分けて説明している。中央と地方の間に設けられた緊急通信制度としての駅路（駅制）、中央から地方へ派遣する使者専用に用いられた伝馬路（伝馬制）、伝馬をも含んだ、郡家が持つ多様な交通機能の総称としての伝路（伝制）である。「伝」から一部を抜き出して、全国的に編成したものが伝路である、とする。例えるなら、高速道路、国道、県道といったところだろうか。

また鶴島俊彦氏は肥後の古代道路を復元する中で坂口遺跡周辺を、西海道本路から田島廃寺、上鶴頭遺跡、鞠智城を結ぶ伝路ではないかと仮定している。

木下良氏は「車路（くるまじ）」という地名に着目して古代道路の復元を試みでおられるが、「車路」のほぼ終点に仮定される地名に「立石」があるとい

う指摘がある。坂口遺跡の南に隣接して「立石」という小字名があることも一つ付け加えておきたい。

2 岡遺跡・田島廃寺との関連について

今回の調査における成果は、第一に道路状遺構の検出が挙げられる。道路状遺構は一般に遺物を多く伴うものではない。しかし、硬化面を含む層であるV層に古代の遺物が含まれることと調査区から出土した遺物の多くが古代のものとみられること、そして周囲に田島廃寺と岡遺跡を配することから道路の使用時期も平安中期とみてよいと思われる。さらに硬化がそれほど激しくないことから短期間の使用が推測される。

今回の調査では合計14点の布目瓦片が出土した。岡遺跡と田島廃寺から出土した資料を実見したが、岡遺跡のものは表面が白く風化し、断面は灰色を帯びた黒色である。一方、田島廃寺のものは岡遺跡のものより褐色を帯びた色調である。焼成はともに良好で、胎土にも特徴的な差異は見られない。調査区から出土した瓦片は肉眼で観察する限り、田島廃寺で見つかっているものと同質であるが、岡遺跡のものと似ているものも数点ある。瓦片は道路状硬化面に伴うものではなく、Ⅱ層からV層に渡って含まれるため、高所からの流れ込みによるものと思われる。したがって、道路状遺構が岡遺跡や田島廃寺と関連するものなのかどうかは不明である。

第IV章　まとめ

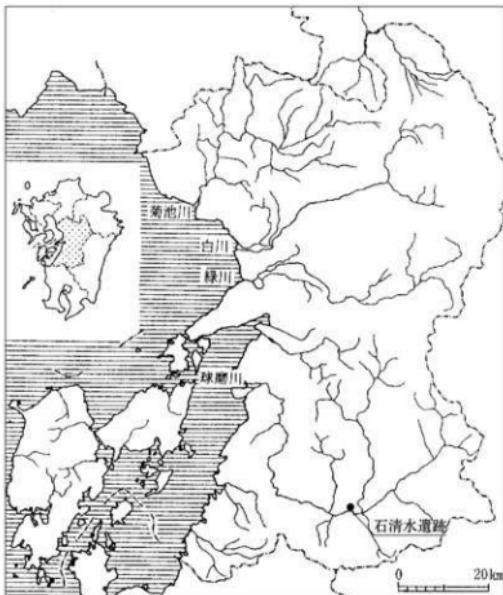
(参考文献)

- 平野敏也・工藤敬一編「図説熊本県の歴史」河出書房新社、1977年
九州歴史資料館編「九州古瓦図録」昭和56年
「熊本県の地名」日本歴史地名体系44、平凡社、1985年
中村太一「日本の古代道路を探す—律令国家のアウトバーンー」平凡社新書、平凡社、2000年
鶴島俊彦「肥後国北部の古代官道」
　　『古代交通研究第7号』、1997年『肥後考古学会発表資料』、1998年
「合志町史」合志町、昭和63年
「菊池市史」菊池市、昭和57年
松本雅明編「田島庵寺調査報告」泗水町教育委員会、昭和47年
「熊本県の条里」熊本県教育委員会、昭和52年
橋本康夫・鶴島俊彦編「熊本県文化財調査報告第63集　上鶴頭遺跡」熊本県教育委員会、1983年
西住欣一郎編「熊本県文化財調査報告第121集　うてな遺跡」熊本県教育委員会、1992年

ほか

いわしみず
第Ⅱ部 石清水遺跡

—下林柳瀬線街路改良事業に伴う埋蔵文化財調査—



第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の経緯

平成7年1月、平成7年度以降の事業予定が人吉土木事務所長より提出され、県道下林柳瀬線緊急地方道路整備事業に関する事業計画が示された。これをうけ、事業予定地となっている箇所について熊本県教育委員会が遺跡台帳と照合、現地踏査を実施したところ、事業予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「石清水遺跡」に該当することがわかった。そのため工事着手に際しては文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知の提出と、事前に確認調査を実施することが必要である旨通知を行った。

これにより埋蔵文化財確認調査の依頼が人吉土木事務所長より提出され、熊本県文化課では依頼箇所において3次にわたって試掘・確認調査を実施した。第3次確認調査を実施したところ、遺構が検出されたため当該地において工事に着手する場合は本調査が必要である旨回答をした。

その後協議を重ね、平成11年6月9日付の人吉土木事務所長からの依頼を受け、本調査を実施した。

調査の目的は埋蔵文化財の破壊に係る記録保存である。発掘調査は平成11年8月10日より開始し、平成11年9月9日に終了した。調査期間は1ヶ月である。

第2節 調査の方法と経過

調査区は道路に沿って幅（南北）約4m、長さ（東西）約25mの細長い形となっている。そこで調査区の外に3点基準を定め、南北（A～C）と東西（1～6）の軸が直行するように5mピッチでグリッドを設定した。

表土剥ぎに関しては、確認調査の結果をもとにII層まで重機を用いて掘削した。

掘削後は約100m²の調査区の全域にピット状遺構が検出された。黄色（IV層、アカホヤ火山灰）に黒

（II層、黒色土）の埋土となっているため、遺構の検出は容易であったが、大量のピットを目の前に「樹根か、柱穴か」の判断が難しく、慎重に検討を重ねていった。

9月にはいると調査も大詰めとなり、アカホヤ火山灰層（東は約20cm、西は約40cmの厚み）を除去してその下の層に遺構や遺物が見られないか、確認を行った。いくつかピットも見られたが、全て樹根と判断した。さらにトレンチ（試掘坑）をいれて確認を試みたが、その下層からも遺構・遺物ともに確認されず、調査を終了した。

◎調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

■発掘調査（平成11年度）

調査責任者 豊田貞二

（首席教育審議員兼文化課長）

川上康治（課長補佐）

調査統括 烏津義昭（課長補佐）

江本 直

（主幹兼文化財調査第2係長）

調査担当 後藤貴美子（文化財保護主事）

水上 仁（嘱託）

調査事務 小齊久代（総務係長）

廣瀬泰之（参考）

川口久夫（主事）

■報告書作成（平成12年度）

調査責任者 阪井大文（文化課長）

川上康治（課長補佐）

調査統括 烏津義昭（課長補佐）

江本 直

（主幹兼文化財調査第2係長）

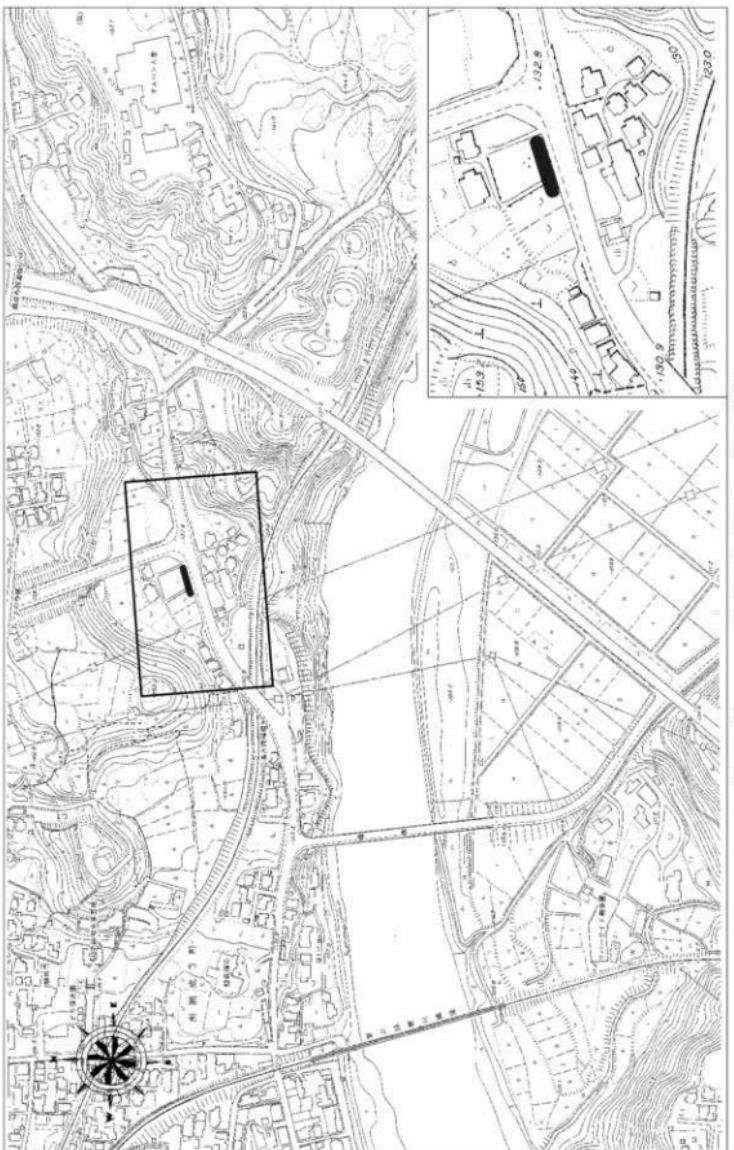
調査担当 後藤貴美子（文化財保護主事）

横山明代（嘱託）

調査事務 中村幸宏（総務係長）

廣瀬泰之（参考）

杉村輝彦（主事）



第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

石清水遺跡は熊本県人吉市願成寺町に所在する。遺跡の所在する人吉市は、東を球磨郡相良村、同郡錦町、北を同郡山江村、西を同郡球磨村、南を宮崎県えびの市、鹿児島県大口市とそれぞれ接している。水路・陸路の両面からみても周辺地域の中で突出した交通運輸上の利点を備えており、古代から現在に至るまで政治的・文化的な中心地となっている。

地理的には熊本県の南東部にあたる人吉盆地の西部になる。東西に長い盆地の周囲には九州山地が連続と広がり、その中にぼつぼつと見られる盆地の中で人吉盆地はひときわ大きな面積を占めている。盆地の標高は100~200mである。

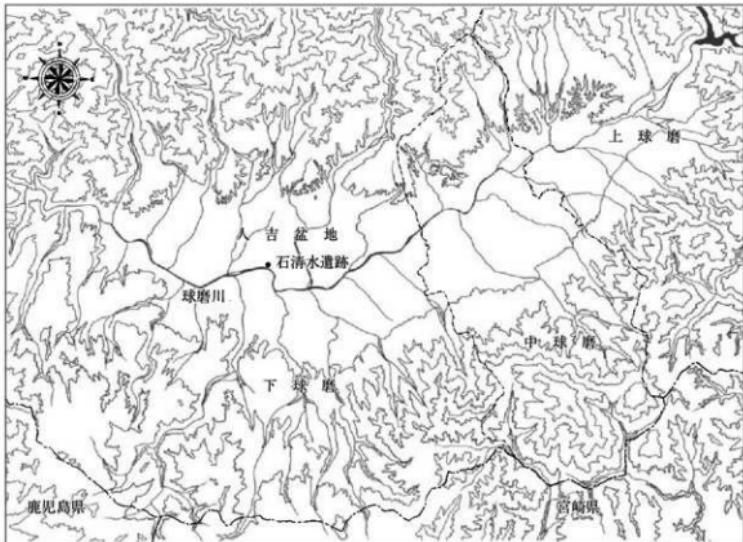
人吉盆地の中央では1級河川の球磨川が東から西へ貫流する。球磨川は全長115km、県下有数の河川である。支流の数は80余、流域面積は1,880km²

であり、これは熊本県の面積の約25%にあたる。人吉盆地は球磨川の流路に沿って沖積地と台地・丘陵に分けられる。

また東西に細長い人吉盆地を東部・中央部・西部の3つに分け、それぞれを上・中・下球磨と称している。遺跡の所在する人吉市は下球磨にある。

下球磨地方の球磨川南岸（左岸）には鹿児島の姶良を起源とする入戸火砕流（シラス）を基盤とする台地・丘陵が分布する。一方北岸（右岸）には球磨川の代表的な支流である川辺川によって形成された広大な扇状地と、阿蘇溶結凝灰岩やシラスを基盤とする丘陵地とに分けられる。

石清水遺跡は丘陵と球磨川にはさまれた平坦面の縁辺部に位置している。標高は約130mである。ちなみに、遺跡の東方約500mのところには山水が湧き出ているところがあり、周辺の字名を石清水（いわしみず）という。



第2図 周辺地形略図



第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

現在、球磨・人吉地方で確認されている旧石器時代の遺跡は50箇所を越える。近隣の遺跡では人吉市白鳥平遺跡、同鼓ヶ峰遺跡、山江村大丸・藤の迫遺跡、同里谷遺跡などがある。石清水遺跡では人吉市が調査した箇所（今回の調査区から約100m東）から遺物が出土している。

2 縄文時代

石清水遺跡では以前に押型文土器が採取され、石清水式土器という標式土器になっている。底部は弱い上げ底で胴部にわずかな屈曲をもつ、などの特徴がある。

3 弓生時代

弓生後期に位置付けられている重弧文土器（通称免田式土器）は、免田町本目遺跡、人吉市荒毛遺跡などで数多く採集されており、球磨・人吉地方では30箇所以上で確認されている。

4 古墳時代

古墳時代前期の、南九州における特徴的な墓である地下式板石積石室墓群が特筆される。荒毛遺跡では多量の鉄製武器を共伴する。また球磨・人吉地方は装飾古墳の南限とされており、人吉市大村横穴群は国指定の重要文化財となっている。

5 古代

原始から古代にかけての人吉盆地での中心は中球磨である。免田町・錦町・深田村の球磨郡衙比定地、錦町下り山遺跡などの古窯跡、藏骨器出土遺跡、集落など多種多様である。また中世の中心地は下球磨に移るため、古代末はその過渡期とも言える。

6 中・近世

石清水遺跡では中世の土坑を検出したため、この時期について少し詳しく触れてみることにする。

建久3（1192）年、源頼朝が征夷大將軍に任命され、本格的な幕府体制の政治が始まった。頼朝は全國に守護・地頭を配置し、從来の莊園領主や在地支配層との多重支配になることも多かった。

このころ球磨は公領（国）、鎌倉殿御領（武家）、蓮華王院領（皇室）の莊園等が入り乱れる複雑な状

況であった。建久3年、球磨は「片寄せ」（所領の再編成）が行われ、上球磨を公領、中球磨を鎌倉殿御領、下球磨を人吉庄とされた。建久8（1197）年の「肥後國球磨郡園田帳写（相良家文書）」によると、球磨郡は2000丁のうち600丁が八条女院を領家とする蓮華王院領、500丁が鎌倉殿御領、公田が900丁とあり、人吉次郎や須恵小太郎、久米三郎等、それぞれに重複して支配を任されている在地系領主がいたことがわかる。

人吉庄は初め蓮華王院に寄進されたがその後平賴盛に与えられ、矢瀬主馬佑が代官として管理にあたっていた。遠江の御家人である相良頼景が多良木に下向したのは建久4（1193）年である。建久9（1198）年にはその子長頼が人吉庄に下向し、矢瀬主馬佑を討って人吉城に入城した。さらに元久2（1205）年には人吉庄の地頭職を得た。相良氏関連の遺跡では多良木町伝頼景館跡、同蓮華寺跡等がある。上相良氏縁の青蓮寺、相良家の菩提寺である願成寺町願成寺などは現在でも寺院としての機能を果たしている。

頼景を祖とする上相良氏と、長頼を祖とする下相良氏は南北朝時代には南朝・北朝の動きに応応して激しく対立するようになり、その影響で中世城が乱立する。遺跡の西方に位置する上の寺城をはじめ、人吉市内だけでもその数は16を数える。文安5（1448）年、下相良氏の系譜である山田（現山江村）の水留（富）長統が上相良氏を破って郡内を統一し、人吉城に入って相良姓となった。

永正元（1504）年には13代長毎が八代・芦北・球磨の三郡支配をなしたが、天正15（1587）年には豊臣秀吉から球磨一郡のみ安堵され、以後明治時代までおよそ700年間、相良氏による支配が続く。

中世の遺跡・史跡には中世城や寺院などが多く、近世になると人吉城に関連した屋敷跡や相良氏関連の神社・仏閣などの検出例が多くなる。そのようななかで中世の水田跡を検出した人吉市七地水田遺跡や、近世の武士階級の墳墓20基を検出した錦町蔵城遺跡などは当時の生活環境を復元する上で興味深い発掘事例である。

第3節 遺跡の層位と包含層

後の礫（レキ）を含む、粘性の強い火山灰土である。

石清水遺跡では以前茶が栽培されていたということで、樹根の影響が心配されたが、表土以下の土層はおむね安定していた。標高は、およそ131.5mである。第4図は調査区の土層断面図である。1は調査区西側、2は調査区中央、3は調査区東側の断面図で、4は調査区中央部の南北断面を記録したものである。

I層

表土。確認調査時においては青磁片を含む陶磁器片が少量出土していたが、今回の調査では、遺物は出土しなかった。

II層

黒色土。しまりは弱い。アカホヤ火山灰の粒子が混じる。III層で検出される遺構の覆土である。

III層

黒褐色土。II層よりもややしまる。厚みはあまりなく、部分的にはIII層がない箇所もある。

IV層

黄褐色土。しまりは強く、粘性は少ない。この層は鮮やかな黄色を呈し、通称アカホヤ、地元ではイモゴと呼ばれる火山灰土である。乾燥するとブロック状に固くなり、ぼろぼろと崩れ掘削しづらい。III層及びこの層の上面が遺構検出面となる。

V層

黒褐色土。粘性があり、ややしまる。

VI層

暗褐色土。やや灰色を帯びる。粘性があり、V層よりしまりは強い。

VII層

褐色土。粘性があり、VI層よりさらにしまる。

VIII層

明褐色土。粘性があり、しまりは強い。

IX層

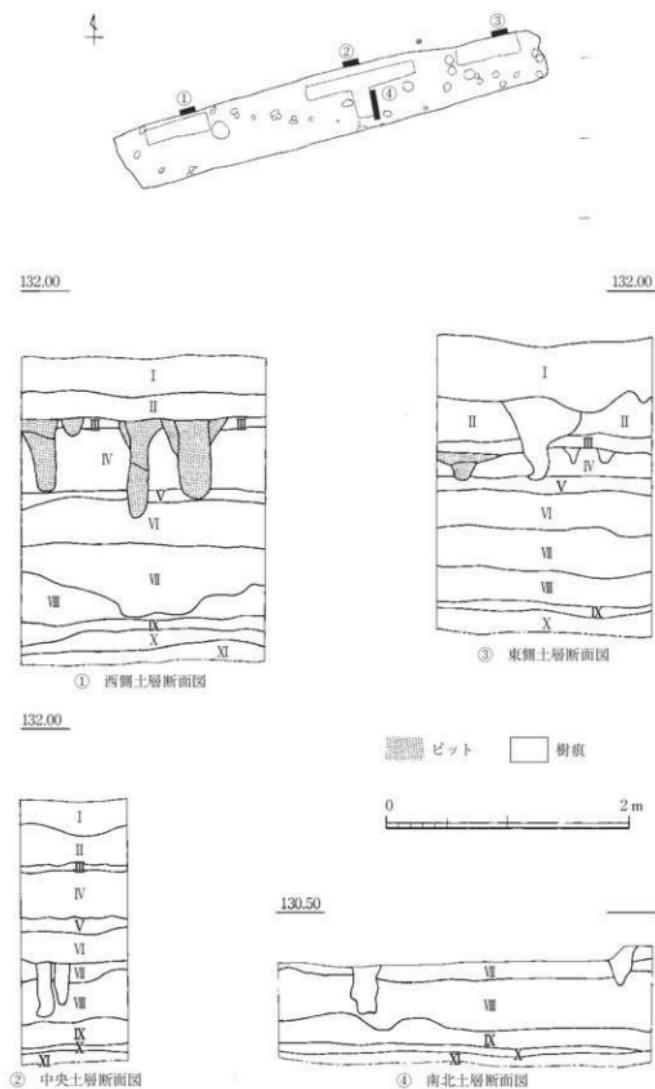
黄褐色土。やや灰色を帯びる火山灰土で、粘性・しまりともに強い。

X層

黄白色土。その下層は黄白色砂質土で、5cm前

層中からの遺物出土はなく、1号土坑より土師器の壊が1点、ピット内より土師器片が4点出土している。

ちなみに上記の土層を周辺の遺物包含層と比較してみると、V層が縄文時代早期、VI層以下が旧石器時代の遺物を含む層となっている。



第4図 土層断面図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 遺構

1 1号土坑について（第6・7図）

径は約1.1mの円形で床面はでこぼこになっており、検出面からの深さは15~20cm程度であるが、上部が削平された可能性がある。IV（アカホヤ）層を掘りこんで作られており、埋土はしまりの弱い黒色土とそれよりややしまる黒褐色土の2層からなる。いずれにも5mm前後の黄色粒（アカホヤ粒）が少量混じる。

第7図は土坑から出土した土師器の壺である。口径11.4cm、底径6.0cm、高さ3.8cmを計る。底面は糸切り離しで板状圧痕が残る。精緻な作りで、内外面に一部すすぐ付着する。

2 構造遺構について（第8図）

1号構造遺構は9つ（以上）のピットで形成され、間隔は1~1.3m、検出面からの深さは20~95cmである。埋土は黒色土・黒褐色土でアカホヤの粒子が少量混じる。

2号構造遺構は4つ（以上）のピットで形成され、間隔は1.2~1.4m、検出面からの深さは22~43cmである。埋土は黒色土・黒褐色土でアカホヤの粒子が少量混じる。

ともに遺構に伴う遺物は出土しなかった。

3 ピット状遺構について

石清水遺跡では約100m²の調査区に273のピット状遺構を検出した。特に調査区の西側と東側とに集中している。IV層を掘りこんでおり、それが人為的なものなのか自然の樹根であるのか判断しかねるものが多くあった。

埋土について見てみると、西のはうはII層の黒色土を埋土とするものが多く、東のはうはIII層の黒褐色土を埋土とするものが多い。いずれもアカホヤの粒子が混じっているが、粒子の大きさや混入の割合などに差がある。その中で埋土自体はほとんど均一であるものの、中心部にアカホヤ粒子の混入が見られない部分を柱痕跡として記録した。

径は小さいもので14cm程度、大きいもので60cm程度、梢円形を呈するものも多く、長軸の長さが1mに近いものもある。深さは11cmから165cmまでだが、全体的に見ると75~85cm、95~100cm、30~40cm、45~60cmのところで多くなっている。また掘り方については途中で段がついているものも1割程度ある。

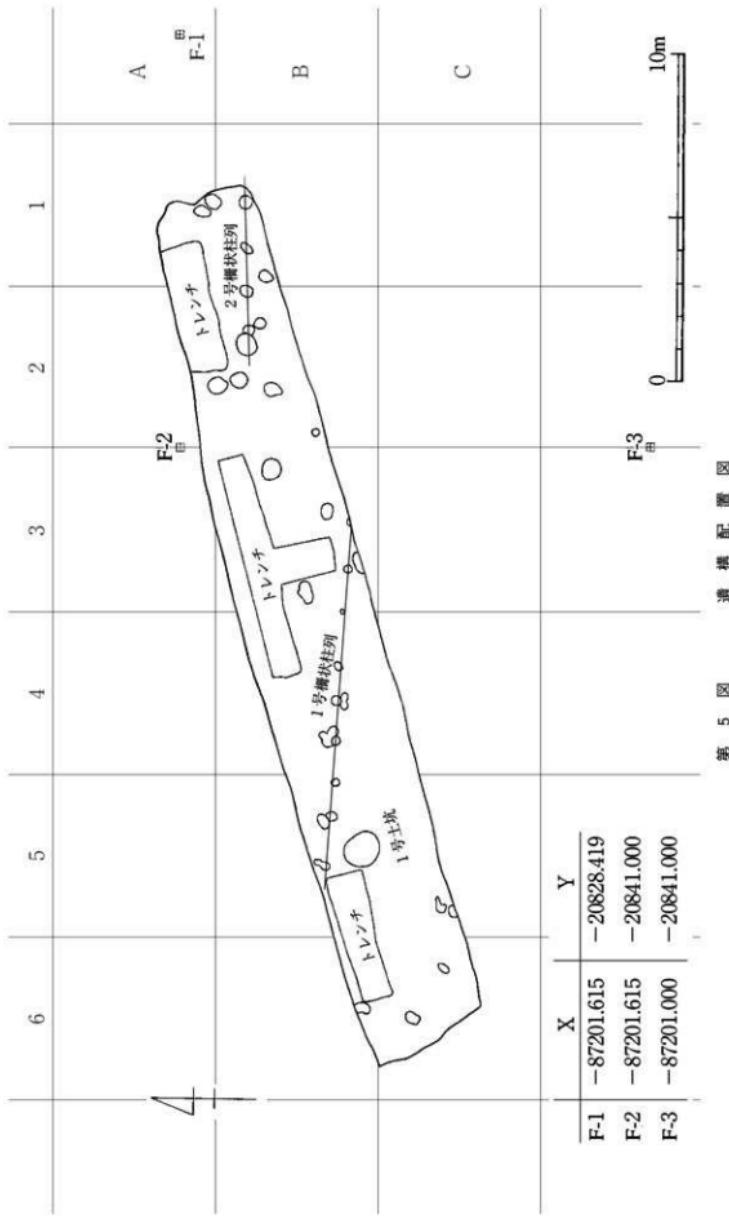
配置について見てみると、2ないしは3つ程度で切り合っているものが全体の1割程度ある。そのほとんどは埋土にあまり差がなく、平面での切り合い関係（新旧）の判別が困難であり、断面での確認を要した。

掘りあげたあととの壁には径1cm程度の「黄色に黒の水玉模様」があり、掘り方もでこぼこで柱穴にしては深すぎる穴も多いということなどから当初は樹根ではないかと考えた。しかし、柱痕のあるピットがあり、そのピットと形状が似ている穴が多いことや、でこぼこの掘り方もアカホヤ層がブロック状に崩れることからそうなったのではないかと考え、明らかに樹根であると確信したものを除き全て図化することにしたものである。

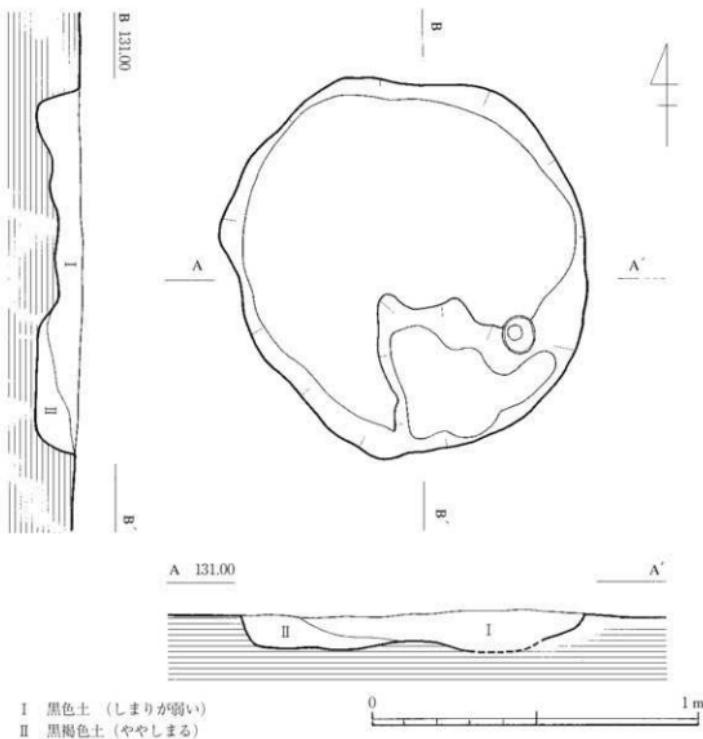
第2節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土坑から出土した土師器壺のほかは4点のみである。いずれもピットの上層に落ちこむかたちで検出された。1点は縄文土器、3点は土師器片である。うち1点は胴部片であり図化にはいたらなかった。

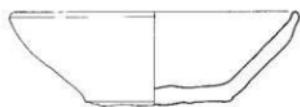
第9図に図化したSP01、SP04から出土した遺物はいずれも土師器である。内外面は回転台を用いた横ナデによる調整で、焼成は良好である。2点とも1号土坑出土の土師器と時期差はないように思われる。



第5図 遺構配置図



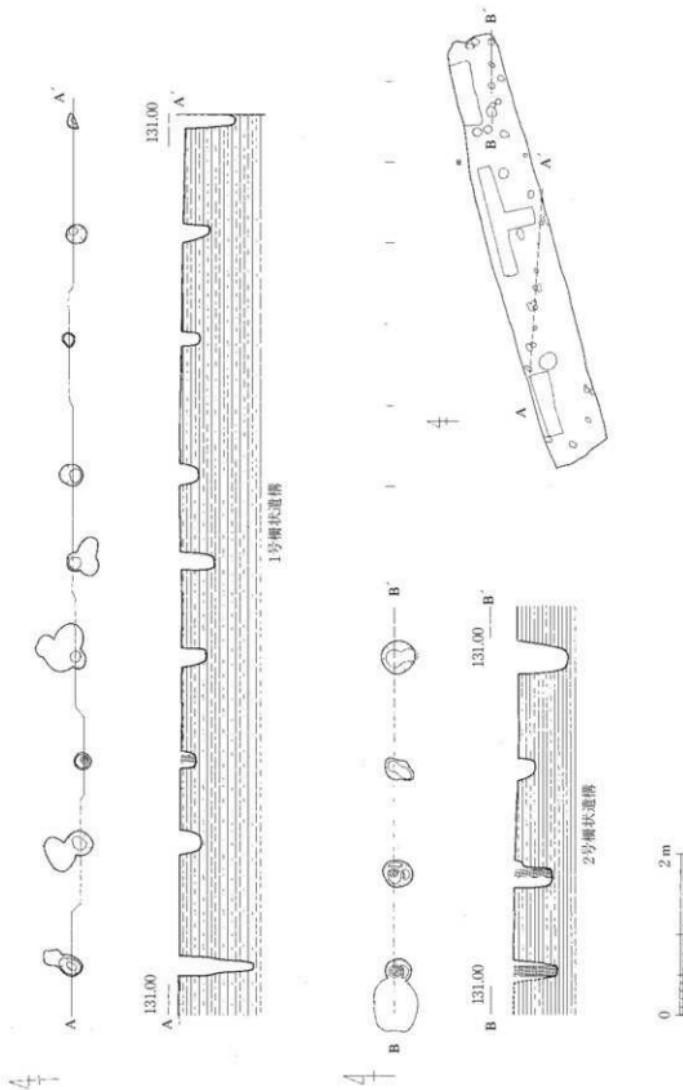
第6図 1号土坑実測図

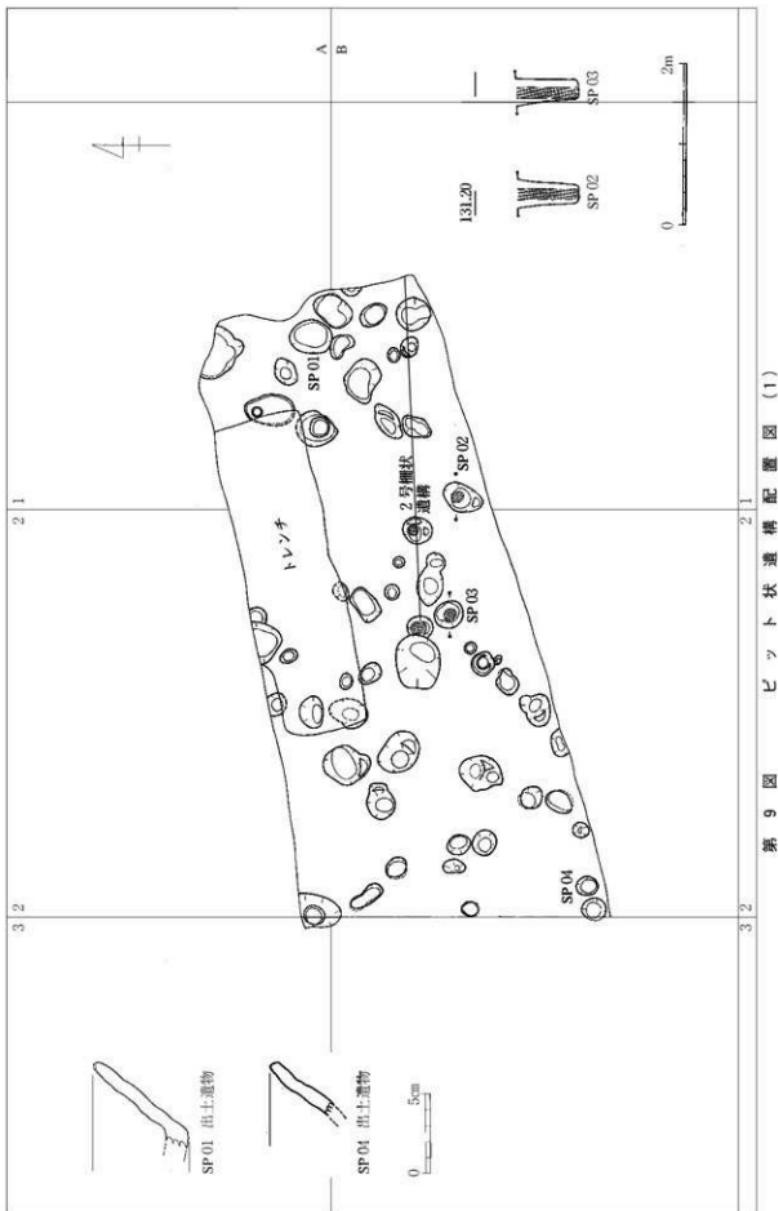


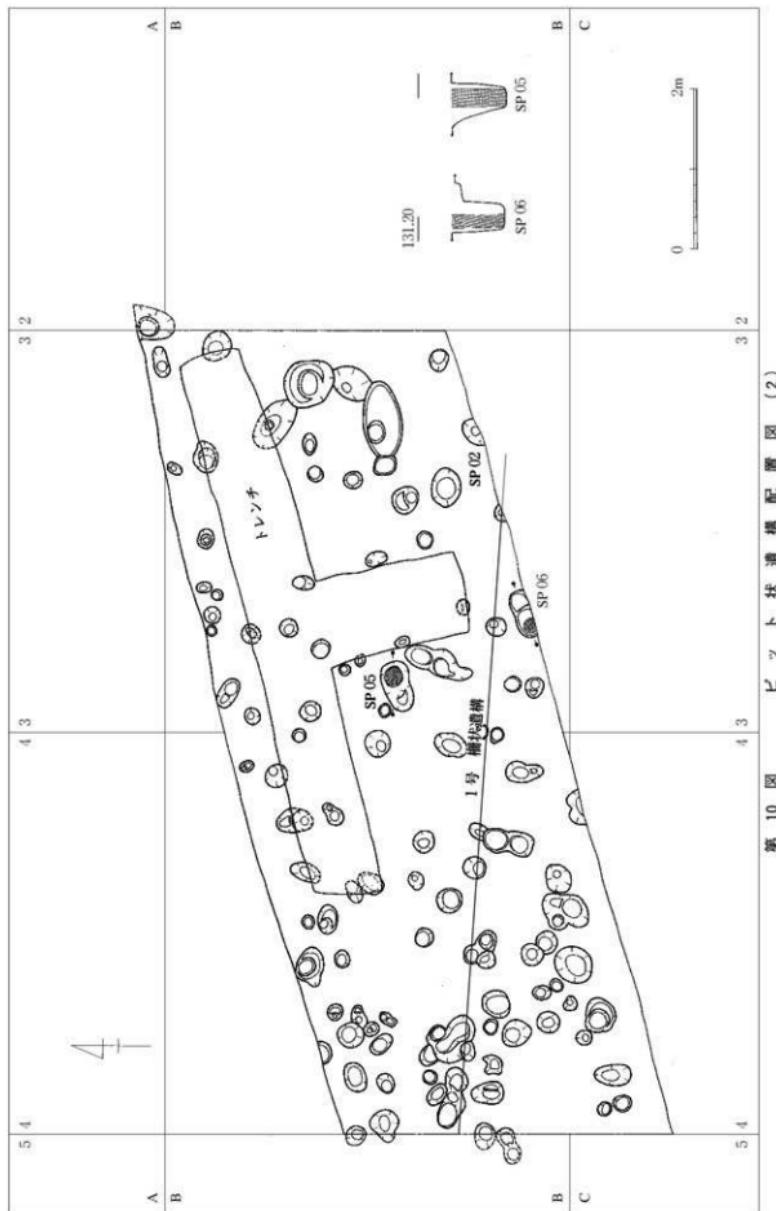
0 5 cm

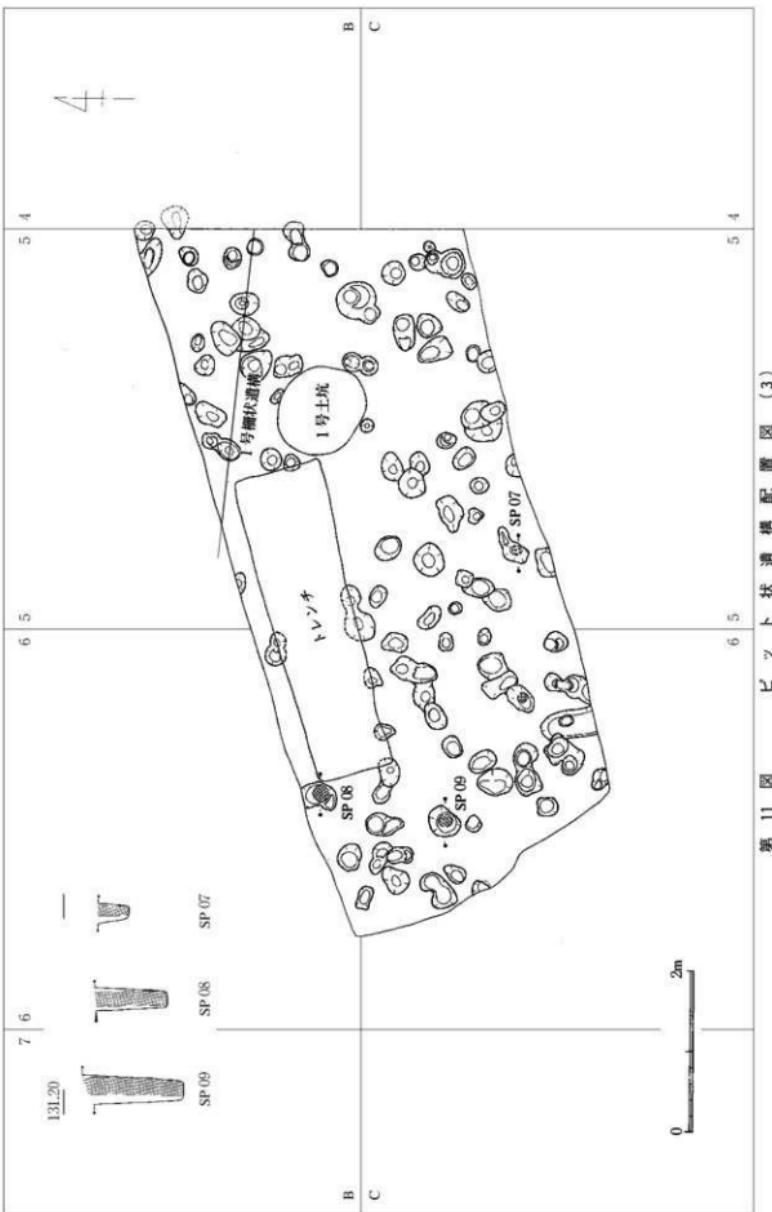
第7図 1号土坑出土遺物実測図

第8図 棚状造構









第11図 ビット状遺構配置図(3)

第IV章 まとめ

今回の調査では、中世の遺構として土師器壺を伴う土坑1基と、それと時期をほぼ同じくすると思われる多数のピット状遺構と、数点の土師器を検出した。遺跡の特徴として次のことが挙げられる。第1にピットの数が多いこと、第2に遺物の量が少ないことである。

第III章でも述べたとおり、図化した中には人為的なものであると確信できないものも含まれるが、柱痕のあるピットも存在する。大量のピットというは中世の、特に山城で見られる特徴の一つである。「熊本県文化財調査報告第102集 山田城跡」では「城は非常時のキャンプ地であるがゆえに方形に限らず不安定なものも想定してよい」という大三輪龍彦鶴見大学教授の助言がある。球磨郡錦町所在の藏城遺跡では、平行四辺形の掘立柱建物も1棟検出している。

調査区西方の微高地には中世の山城である上の寺城があり、それとの関係も考えられる。球磨地方の中世城は球磨川やその支流に沿って数多く存在する。

石清水遺跡もそのような遺跡の一つかもしれない。また、調査区の西方には相良氏の菩提寺である願成寺があるが、人吉城跡の調査報告の中で「もと館であった場所が寺院として利用された可能性もある」と指摘している。

今回の調査で唯一時期をはかる資料となるのは土坑から出土した土師器壺であるが、前述の山田城跡から出土している14世紀に比定されているものと似ており、他の調査報告でも同様の時期に比定されているものと似る。土坑が14世紀くらいのものであるとすると土坑が造られた時期は南北朝期にあたり、上・下相良氏が対立を深めている時期に相当する。さらにピット群はそれに先行する時期となるが埋土には顕著な差は見られず、ピットに落ち込んでいる遺物から状況的に判断すると鎌倉時代あたりが妥当かと思われる。

遺跡の時期は中世とみてよいと思われるが、それ以上判断できる材料はない。

<参考文献>（第I章から第IV章まで、順不同）

- 「熊本県の地名」日本歴史地名体系44、平凡社、1985年
- 美濃口雅朗「熊本県における中世前期の土師器について」
- 『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会、1994年
- 多良木町史編纂会編「多良木町史」多良木町史編纂会、昭和55年
- 人吉市編さん協議会編「人吉市史第一巻」人吉市教育委員会、昭和56年
- 鶴島俊彦編「人吉市文化財調査報告第16集 史跡人吉城跡Ⅱ」人吉市教育委員会、1996年
- 鶴島俊彦編「人吉市文化財調査報告第17集 史跡人吉城跡Ⅲ」人吉市教育委員会、1997年
- 隈昭志ほか編「熊本県文化財調査報告第22集 運華寺跡・相良頼景館跡」熊本県教育委員会、昭和52年
- 隈昭志ほか編「熊本県文化財調査報告第30集 熊本県の中世城跡」熊本県教育委員会、1978年
- 大田幸博編「熊本県文化財調査報告第102集 山田城跡」熊本県教育委員会、1989年
- 西住欣一郎編「熊本県文化財調査報告第103集 天道ヶ尾遺跡」熊本県教育委員会、1989年
- 矢野裕介編「熊本県文化財調査報告第172集 藏城遺跡」熊本県教育委員会、1999年

ほか

報告書抄録

フリガナ	サカグチイセキ・イワシミズイセキ
書名	坂口遺跡・石清水遺跡
副書名	主要地方道熊本菊池線単県道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 下林柳瀬線街路改良事業に伴う埋蔵文化財調査
卷次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第201集
編著者名	後藤 貴美子
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8570 熊本県水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2001年3月31日

フリガナ 所取遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
サカグチ 坂口	熊本県菊池郡 西水町 大字田島字坂口	406	079	32° 56' 13"	130° 44' 58"	H11.7.7 ~ H11.8.6	約200m ²	道路改良
イワシミズ 石清水	熊本県人吉市 願成寺町 字上の寺	203	014	32° 12' 42"	130° 46' 34"	H11.8.10 ~ H11.9.9	約100m ²	道路改良

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
坂口	包蔵地	平安時代 鎌倉時代	道路状遺構	土師器、須恵器 青磁	
石清水	包蔵地	鎌倉時代 室町時代	土坑 1基 柵状遺構 2基	土師器坏	

図 版

図版1 坂口遺跡



1 道路状遺構第1面 (BC グリッド周辺、南から)



2 道路状遺構第2面 (C グリッド周辺、南から)

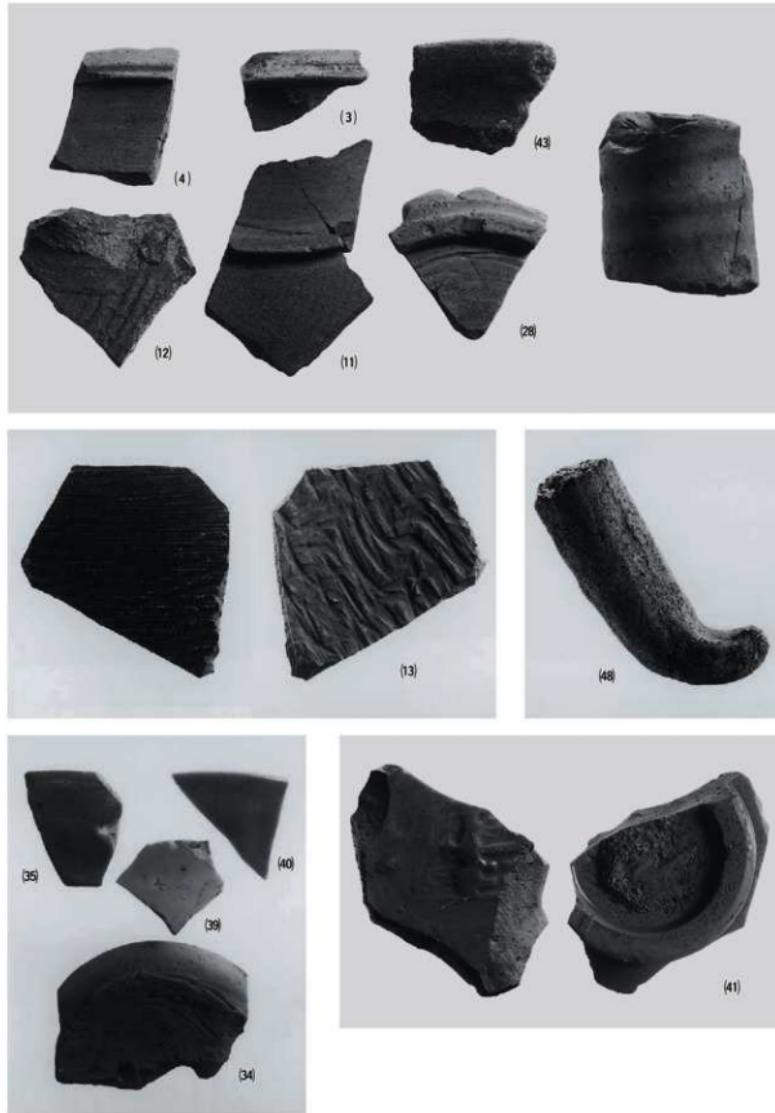


3 道路状遺構第2面 (DE グリッド周辺、南から)



4 作業風景

図版2 板口遺跡出土遺物



※（ ）内の数字は実測図の番号

図版3 坂口遺跡出土瓦及び参考資料



1 坂口遺跡出土布目瓦



2・3 岡遺跡出土布目瓦（参考資料）



4・5 田島廃寺出土布目瓦（参考資料）



図版 4 石清水遺跡



1 全景



2 ピット断面(北壁)



3 ピット断面(部分)

図版 5 石清水遺跡



1 作業風景



2 1号土坑遺物出土状況



3 1号土坑出土遺物

熊本県文化財調査報告 第201集
坂口遺跡・石清水遺跡

平成13年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862-8570熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 シモダ印刷株式会社熊本支店
〒862-0951熊本市上水前寺2丁目16-16

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第201集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：坂口遺跡 石清水遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日